紅茶会 三両二分 通う神 紀 の国屋

段階子 手鞠の友 湯帰: ij 描ける幻

道 断 下 かた 狂犬源兵衛

朝

言語

半札 の 円輔 犬張子 胸騒 鶯

白木の箱 灰神楽 星

はそのすっきりと脊の高い、緊った制服の姿を籐の椅子の大三人の紅茶を一個々々硝子杯に煎じ出した時、柳沢時一郎は各々適宜に入れることにしよう。さあ、神月。」「紅茶の御馳走だ、君、寄宿舎の中だから何にもない、砂糖

渠は腕袋の美しい片肱を椅子の縁に掛けて、きなのに、無造作に落していった。 悠然とぶら下

「篠塚、その砂糖をお客様に出して上げろ。」げながら、

な仁体、篠塚 某 という哲学家。一脚の卓子を囲んで、卵沢じんで、 篠におし いう哲学家。一脚の卓子を囲んで、卵沢「おい、」と心安げに答えたのは和尚天窓で、背広を着た柔和 を伸すと雑書を納れた本箱の上から、一瓶の角砂糖を取って、と差向いに同じ椅子に掛けていたが、体を捻って、背後へ手な仁体、篠塚、某、という哲学家。一脚の卓子を囲んで、柳沢、 これを二人の間に居る一人の美少年の前に置いた。 -1-

「取って頂くよ。」と優しく会釈する、これが神月と呼ばれ

名を梓という同窓の文学士、いずれも歴々の人物で

粛然として読書する薄髯のあるのを見て、く椅子の背後に、裏を翻して引懸けて、片手を袴に入れて、手織の綿入に小倉の、袴、、紬の羽織を脱いだのを、小さいのを取って前に引いたが、いま一人哲学者と肩を小さいのを取って前に引いたが、いま一人哲学者と肩を 梓は柳沢が煎じてくれた紅茶の、 いま一人哲学者と肩を並べい、薄紅色の透取る硝子杯の 片手を袴に入れて、 紐む 長

ある。 た客で、

「何を読んでるんです、」と少しく腰を浮かして、差覗いて聞

をするのであるか、自分にも分らないで迂路々々するのを柳「僕、」と応じはしたけれども、急に顔を上げたので誰に返事いた。

ばらくの間も研究を怠らない。」「若狭が読んでるのは歴史だよ、国史専修の先生だもの、」

沢は気軽に引取って、

と笑いながら、その読んでる書を横目で見た。柳沢は吹出し「御勉強です、」といって神月が点首くと、和尚は、にやにや

「また何ぞの材料にならないとも限らないだろう。」と垶はそ聞えたものらしい。若狭は読みながら莞爾とした。「酷く研究をしております、」と哲学者は仰いで飲む。これがなもんです。無名氏著、岩見武勇伝だから可いじゃあないか。」「真面目な挨拶をする奴があるものか、歴史は歴史だが大変

の硝子杯を手にした。「また何ぞの材料にならないとも限らないだろう。」と梓はそ

を突きながら、柳沢は斜に卓子に凭れて、小刀の柄で紅茶に和した角砂糖

小まさの浄瑠璃の中から哲理を発見するようなもんだ。」「そりゃある、その材料のあることはちょうど何だ、篠塚が

馬鹿をいえ。」

った事があるよ。」「しかし君も鳥屋の女の言は、時に詩調を帯びると、梓は 傍 より、

そうい

底意なき人達は三人一堂に笑った。

「賑かだね、柳沢、」と窓の下の園生から声を懸けたものが

ある。

_

に下を覗いて見て、一番窓に近い柳沢は、乱暴に胸を反して振向いたが、硝子越一番窓に近い柳沢は、乱暴に胸を反して振向いたが、がらすごし

「竜畑か。」

「誰か来ているかい。」

前、器械体操で馴らしたか、身の軽さ、肩を揺り上げて室の同時に、ひよいと窓の縁に手が懸った、飛附いて、その以「根岸の新華族だ、入れ。」と云って座に直る。

いうのである。

梓を見て笑を含み、

中に、まずその瀟洒なる顔を出したのは、

竜田、

名を若吉と

て、腕組をして外壁に附着いたままで居る。柳沢は椅子をずらし腕組をして外壁に附着いたままで居る。柳沢は椅子をずらし「堪忍してやれ、神月はもう子爵じゃあない。」といいながら

居たらばッてそういってな。」く弁論に窮して、き様の来るのを待っていたんだぜ、竜田がいうのをはじめた処だ。ちょっとその休憩時間よ。神月が酷いまあ入れ、ちょうど可い。今その事に就いて、神月問題と

「可し、また例の筆法で苦しめたか、神月君、」かる毛糸の襟巻の端を背後へ撥ねて、込み、二人の間へ衝と立って、卓子に手を支いたが、解けか過きも果てず、満面に活気を帯び来った竜田は、飜然と躍りましまです、満面に活気を帯び来った竜田は、飜然と躍りませ

-2-

思う、皆親友神月の弁護をするためだね、どうです。」 たもうな。 「よく、僕を待っててくれました、もう大丈夫だ、心配をし 僕何のために学生となって、 法律を研究し てると

竜田はその薩摩飛白の羽織の胸紐をぐッと〆め、「どうぞ宜しく、」といって梓は戯れに頭を下げた。

「さあ、 来い。」

て、柔和な顔を仰向けながら、若吉を瞶めて剃立の髯の痕を撫「またやんちゃんが始まるな、」と哲学者は両手で、頤、を支え

で廻す。

通うのを攻撃するんだろう。」 かの夫人に別れて、 「大概分ってるさ、 谷中の寺に籠城して、そして情婦の処とやなか。ろうじょう問題というのは神月が子爵家を去って、 そして情婦の処へ

沢は大跨に開き直 「勿論、」と簡単、 り、 がちゃりと雑具の中へ小刀を投出して、

柳

も結婚の第一日、すなわち式を挙げた日だ。 「さよう、」と突込んで応ずる竜田の声は明快であ 「最初、神月がその夫人との中に感情を害したのは、不幸に

考えて見ると蓋し神月の方が非なんじゃあないか。」 「き様も知ってるな、僕も聞いた。そうして成程と思ったが、

飛ぶ、 山下の森の中で、光りものがした。 て、上野から汽車に乗込むと、 「何、そんなことがあるものか、 そうすると、あの嚊々め。」 ――と何心なくいったんだ。 まだ赤羽の声も掛らぬうち、 新婚旅行に出掛けようとし 谷中は近し、 神月は -おや、 こり 人 魂 が ゃ

「竜田窘・ 旦那様の前じゃ、」と哲学者が戯れる。

田は、勢よく、「結構、」とい ったのは、 その いわゆる旦那様梓であった。

です、隕石でござい まだしも恕すね。」 「どうだ、小生意気ではない ます、 か、 と云った、 いいえ、 そればかりならば 星が流 れたん

その権式高な、寂しい顔に冷かな笑を帯びてさ、文学士をお夫人。竜子、語を換えて云えば神月の嚊々だ。君、そいつが鼻の隆い、目の強い、源氏物語の精。霊のような、玉。司子は鼻のたが、目の強い、源氏物語の精。霊のような、玉。司子は 蔑したもんだぜ、 「神月が人魂だといったのを聞いた時、あいつ愛嬌の 神月なるもの 癪 に障らざるを得んじゃあな そいつがね 文学士を軽 ない、 -3-

「可し、婿さんは癪に障ったろう。癪に障ったろうが、いか。」

とく、姉のごとく、敬い、尊ばれている名誉を思え、七歳の年紀とく、姉のごとく、敬い、たらと それだけにまた儕輩に群を抜いて、上流の貴婦人に、師のご もっとも余り物質的の名誉を重んずる夫人の性質も極端だが、 夫人その人の身になって、 の性質と、 から仏蘭西へ行って先方の学校で育ったんだ。」 行を見た時の夫人の失望を察せんけりゃ不可。 その時には限らぬが、 すべて神月 、また

「待て、 少し待て。」と竜田は掌で卓子を押え、

を遮り、

前どものは六歳の年紀から仲之町で育ったんです、もっと「まあ待て、先方が七歳の時から仏蘭西で育ったんなら、 もっとも

唯今は数寄屋町に居りますがね。」

とだ。その言一句といえども忽にせず、一挙手一投足とい 学識と、その子爵たる財産と、家屋と、庭園と、十幾人の奴隷だ。どうです、彼が仏蘭西で、学び、日本で得た、すべての えども謹んで、二十七歳の今日まで、 旭 の昇るがごとくに博 恩だというんなら、こっちにだってその一切に気でするものが し得た名誉とを、悉皆神月に捧げて、その妻となったのを、 「可いよ、君、可いから言わしておけ、どうせ、皆御存じなん「竜田、」と留めた、梓は恥ずる色があった。

哲学者は言を挟み、

あるんだよ。」

ははは。」 「見たまえ、また竜田が例の笛と鼓を持出すからな、ははは

てバイブルを読んでいた時に、こっちじゃあ、雪の朝、 「何を失敬な、」と哲学者をちょっと睨んで、

突飛ばされて、仰向けに倒れると見っともないといって頬板もない位、夜はというと座敷を廻り歩いちゃあ、年上の奴に られる。直ぐに踊の師匠に打ちのめされるんだ。生疵の絶間 べる、帰ると三味線のお温習をして、そのまま下方の稽古に遣返らして、それから握飯の針のようなのを二ツずつ貰って食 食べさせない、酢るもんか、寒い処を、笛を習ってる中に呼吸吹込む呼吸が強くなるためだといって抱、主が、君、朝御飯も を打たれたもんだ、何のためだ、同じ我々同胞の中へ生れて が続かぬから気絶するのが、毎朝のようだ、水を吹かけて生 てるのを戸外へ突出されて、横笛の稽古をさせられたんだ。 「そうさ、持出すが悪いか。先方じゃあ巴里で、麺麭を食っ 顫ẫ え

> な孤児をどうするんです、ねえ君、そこは男子の意地だ。」と綾羅錦繍と、三味線と冷酒と踊とのみあって存する、あわれりょうらきんほう うだね、殊に親も兄弟も叔父叔母もない。ただ手足と、顔と、 もって、 来て、一方は髯を生して馬車に乗った奴に尊敬される、一方 たるもの、宜しく彼を棄ててこれを救うべしじゃないか。ど は客とさえいやあ馬の骨にまで、その笛をもって、その踊を 勤めるんです、この間に処して板挟となった、 神月

「あらず、そういう意地は、鳶の者も持ってるじゃあないか。」 柳沢は冷然として、 若い人は意気頗る昂った。

兀

る処を聴いていた文学士は、太くこれを感じた様子で、 が見えて、ほとんど茫然したかのごとく、柳沢と竜田の論ず き来って、床下を決して戸外へ抜けたのである。 先刻からわざと笑顔を装いながら、何か澄まないらしい色

ッがッという響がした。この音は校舎の奥の方より遥に轟いがっという響がした。この音は校舎の奥の方より遥によるできるできる。この折から譬えば荒滝をずたずたに切って落すような、が

って、 「何だね、今の音は、」と安からぬ状して尋ねた。 柳沢、そのあらぬ方を瞶めていて落着かない梓の面を瞻れるいない。

「忘れたか、

「今の音を。 何を。」 室を煖める蒸気じゃあないか。」

言う時、煉瓦造の高い寄宿舎の二階から一文字に懸けてあ

た。硝子窓は朦朧として、夕暮の寒さが身に染みるほど室のる、鉄の樋が鳴って、深い溝を一団の湯気が白々と渦ぎき上っくのがねりた。

に置き、柳沢は片手を握って、長くこれを神月に差向けて卓子の上が沢は片手を握って、長くこれを神月に差向けて卓子の上

煖まるのが感じらるる。

助けたものは、天下に今の夫人を措いて他にゃなかろう。認めていた、けれども、いざとなって金貨を積んでその業をあったではないか。神月、君が俊才有為の士である事は皆がんとするごとに、常に仏文の手紙が添て、行届いた仕送がのだ。既に幾たびも君が学資に窮して、休学の已むを得ざら「それだからもう寄宿舎に居た頃の事を君は忘れてしまった

と間違っているじゃあないか。」ただその知己であるというばかりに対しても、君の「行」はち夫人の名誉のため、幸福のため、子爵のためというよりも、そうすりゃ恩人でまた唯一の知己といわなければならない。

は凜として姿を調え、梓は聞いて物をもいわず差俯向いたにも、係らないで、竜田――

じて玉司家を嗣いだのは、すなわち君のいう、その知遇に感ど困難なことでもなし、またそのくらいな価で婿に買占めらもって神月を買ったものだと言わなけりゃなりません、そいうごとくんばだ。嚊々殿は仏文の手紙と、若干金の学資とをか、止せ。可いよ、待て、まあ、僕のいうことを、今君のい「柳沢、そんなことをいって僕の居ない時に梓君を苛めるの「柳沢、そんなことをいって僕の居ない時に梓君を苛めるの

じたからだ。

を害ねたのはどういう訳だい。といっているに、のっけから人魂と流星の事で早くも神月の感情

んじゃあない。うことのあろう筈はない、といった調子だから耐った訳のも情話を聞かされると頭痛がして来るといやあ、生理上そういまべて女学校の教科書が貴婦人に化けたような訳で、まず

女房にしていらるるもんか。」

女房にしていらるるもんか。」

女房にしていらるるもんか。」

女房にしていらるるもんか。

五

ゃあないか。だのと、体の可い名は附けるものの、何がなし見得坊なんじだのと、体の可い名は附けるものの、何がなし見得坊なんじ「考えて見たまえな、名誉だの、品性だの、上流の婦人の亀鑑

あたかも神月君が社をして書かしめたように当り散らしたとた、世の中へ顔出しも出来ないてッたようなことを云って、てあったといって、嚊々め恐しく 憤って、名誉を蹂 躪されか夫人がかねて神月に恋をしていたというような意味が書いの関係を知ってる新聞が報道をすると、その記事の中に、何の関係なさい、だから神月と結婚をした当座に、はじめから

心得るような見得坊がまたあるかい、怪しからんじゃあない いうんだ。夫に愛しとるということをもって、大なる恥辱と か。」と声を鋭くしていう、竜田はその白面に、紅を漲らし

これを聞いて聞き惚れて、

たのである。

「しっかりやれく〜。」と哲学者も嬉しそうに応援した。

っても可いな。 「それのみならず、数寄屋町と神月君とは神の引合せだと云

ŧ で、子爵家に行ってからも毎月欠かさなかった。去年の夏だ、 第一それからして夫人と衝突する基じゃあったろうけれど 寄宿舎に居る時分から、湯島の天神へ参詣をするのが例 神月は先天的、むしろ家庭的か、そうだ、家庭的信心者

るといっても小児だから訳が分らぬ。内気な殿様だから顔を続めると云った。 懐を探すと神月が懐中物を忘れたね、後に届け うので、御手洗で清めようとすると、番の小児が水銭をくれまだ朝早いのに湯島に参って、これから鰐口を鳴らそうと思 それが御縁となりましたのが、唯今の美人です。蝶さんなん くしてまごまごしたッさ。そこへ来合せて水銭を達引いて、

「解りましたよ。」とい 神月は極悪げに、 って柳沢は詮方なげに苦笑した。

「もう可いじゃないか、 皆僕が悪いんだから、 まあ、

てして、それで、 貢献するのに、 「いいえ悪かないよ。僕は大賛成、一体婦人が男子に対して 自分の名誉だの、財産だの、芸術だのをもっ 算盤玉に当って、そろばんだま 差引こうというほど生意

> といわざるを得ないな。 気なことは無い、いわんや、それに恩を被せるに到っては、不届

を如何よ。その上に一意専念、神月のために形造るに到って単に神月に見捨てられまいということを願ってまた他意なき んだよ、その閲歴に対する報酬として、ただ、ひたすら、 とんど天下に大名をなしたものの、堅忍苦耐したくらいなもの、可いかい。平ッたくこれをいえば苦労だ。その苦労はほ しかるに蝶さんに至っては、その今まで為し来ったすべて

か。 人ばかりではない。譬えば、 「しかし竜田、アダムとイヴあって以来、世界に男女ただ二

神月とその美人と、」

らない名誉だの、財産だの、

徳義だのに、毛一筋も払うもん

は、男子すべからくこれがために名と体とを与うべしさ、下

僕も居る、」

「それから俺よ、」

「私も居るわい。」と哲学者は前に屈んで、 顔を差向けていっ

b, ら、幾人居たって私は心配も何もしないが。」と梓は愁然と「加うるに君が居ても差支えない。諸君のような人ばかりな

六

かろう、」と柳沢は慎重に諭した。 「だから神月、君自ら感情を制して、その美人と別れたら可な

もう子爵家を去って、寺に下宿したら可いじゃあない

何

するさ。それでも可けなけりゃ、天に登るこッた。美しい星般の風潮で、日本に容れられなかったら、二人で海外に旅行 か。 でも遣ッつけッちまえ。 癪 に障ったら片 端から弾飛せ。一ので、すべての罪を償うて余 あるもんだと思う。借金でも何 するものには、 が二つ出来るんです。天文学者には分らなくッても、 つのが明かに見出される。」といい放って、 美しい顔を仰向けて、 僕はね、 爵位と、君があの高慢な嚊々とを棄てたという 紫か、緑か、燦然として衆星の中に異彩を放 腕組をした、毛糸の茶色の襟巻は 竜田はその若々し 情を解 でも何

その背を叩いて、

端がほろほろと解けた。

い書の籍を片手で掻退けると、水指を取って、ひらりとその脊両方からつないで下げた電燈の火屋の結目を解いたが、、堆いか。」と、穏に云いながら柳沢は老実々々しく、卓子の上によりよっぽど訳が分ってるよ。だから心配をするんじゃあなよりよっぽど訳が分ってるよ。だから心配をするんじゃあな 柳沢は突立ったまま、重太郎に別れなければならず余儀なくされた。 あり、外套は下ってる。避て通らなければ出られないので、箱が並んで、これに、穿物が脱いであるなり、衣服は掛けて 学士はその卓子越の間道を選んだので、余り臨機な 卓子を真中に、本箱を四壁に塞いだ上に、戸の入口には下駄た。天井はそれよりも遥に高いが、室は狭く、五人を入れて、 しく高く仰ぎ見た。 ったから、 の高い体で、靴のまま卓子の上に上って銅像のごとく突立っ 「江戸ッ児! その心を解せず、 相変らず暢気なものだな、本人の神月は、 ために国史専修の学士も、 は驚いて四方を囲 衣服は掛けて ばらく岩見 であ 君

> 「おい、 ちょっと退かないか。

る時のように難しく眉を顰めた。 「何をする、」と哲学者は呆れ顔をしてほとんど問題を研究す

事も無げに、

「こっちへ寄越せ、僕が行こう、」と哲学者も衝と立上る。 「紅茶を入替えよう、湯を取りに行くんだから、」

くなって、ふッと消えたが、 った、 「そうか。」といいさま、 電燈の球は卓子の上を這ったまま、朱を灌いだように颯と赫 ぱたりと靴の音。 柳沢はひらりと下りて、 白く明くなったと思うと、 身軽に立直

の下に入れ、顔を上げて、 の下に入れ、顔を上げて、清しい目を贈って、「星を仰ぐこと、正に、」と竜田若吉は腰を落し て頭を卓子

「こういう風。」

光を放つ!

手で赤本をおさえてみたが、そのまま腰を掛けて、 せて、灯を宙に釣したと思うと、袴の下へ手を入れて、 って、両手で項を抱きながら、じッと件の電燈を瞶めた。 膝を膝 を放れて疾く背後に退いた。柳沢は長い足を素直に伸ばし梓はその面羞気な顔を照らされるのを厭うがごとく、は一言される。 はじめる、 その時、 に乗せて組違えると同時に仰向けに寝て一杯に肱を張 国史専修の学士は、静に糸を取って、 岩見重太郎武勇伝。 無心に繋合 また読み て、

-7-

七

なわち一足表。打の駒下駄であるが、尾上の使に駈出して来ものがある。大きな紙入ではない。乳、貰の嬰児でもない。するのは、単にこの羽織ばかりではなく、一品懐に入れているりと襟を扱いて手を通した。この男が雨に当てまいと大切がりと襟を かかる人は、下町にまず松の鮓の、忰源次郎を措いて外にはために、汚すまいと懐中した。本人は生白い跣足である。 ので、すべて、お守扱いにしているから、途中で雨を啖った た訳ではない。これはさる筋の芸妓から年玉に買って頂いた を見ると、 空を仰いで立停ったのは、町屋歇んだ、歇んだ、可い塩梅だ。」 畳んで、袂の下に抱え込んでいた羽織 包え込んでいた羽織を一揺、はら町屋風の壮佼で、雨の歇んだの

足が汚れていたから下駄は穿かないで、そのまま懐を揺り固 宗匠を張る時は紋着で巻、莨、色と点取発句が一斉に出来るの であるから、ついこう下駄を懐に入れるような事にもなる。 。しかるに源ちゃんは両天秤、女を張る時は半纏で、顱巻。それ世に、鳶の者の半纏は侠にして旦那の紋着は高等であ かえって説く源ちゃんは町中の暗がりに羽織を着込んだが、

うな独一言をして、また足早に歩き出した。 「可い塩梅だ、 畜生。」と、これも何か両面に意味の通ずるよ

> の顔が、辻を曲って、三軒目の焼芋屋の灯に照された時、背後中を何と睨んだ、ちょっと度のかかった冒金を懸けている名代その面形のごとく凹んだ面の、眉毛の薄い、低い鼻に世の から、錆びたずんぐりした声で、

「誰だい、」と思い人のある身振で、源次郎は振返る。「源じゃあねえか、おい、源坊。」

「俺だ。」

ヤ、」

「待ちねえ。」

ぶらりと、坊主天窓の親仁が一名。 つかつかと近いた、三尺帯を尻下りに結んで、両 提の莨 入

をぶらりと、 頭。

いる。 とも謂わず一群一群入り込む侠な壮佼に、時々木遣を教えて本名は誰も知らない、何をして暮すのか、ただ遊んで、どこ に住んで、頭、 「おい、」と重く落着いて一ツ頷いた。これは下谷西黒門町 頭と立てらるる、辰何とか言うのであろう。

頭は膨らんだ源のその懐をじろりと見て、

何だ、それは、」

「ええ、」

有りゃ、敵の向脛をかッぱらって遁げるゆとりはありそう何を面啖ったか知らねえが、そいつを懐に入れるだけの隙が「下駄じゃあねえか、下駄じゃあねえか、串戯じゃあねえ、 なもんだぜ。何だい、出会したなあ、犬か、 「喧嘩じゃあ ないんです。」 人間か。」

「冗談をいっちゃあ可けません。」 頭はわざとらしく呵々と笑って、

「じゃあ、どうしたんだ。」といったが、思う処あるらしく、「房」

りしたその眉を顰めた。

源次は何の気も付かない様子で、

「仔細はないんです、喧嘩なんて何も決してそんな訳じゃあ

ないんだけれどね、」

にされたので、源次は急に 極 が悪そう。 「ふむ、」と心ある頭は返事まで物々しい。 ちと応答を仰山

げちゃあ、そのね、」と今更のように懐を飾して、 「降って来たもんですから、その何なんですよ、泥でも刎上はねる

「へへへへ、なに詰んねえ事なんで、」

「あれだな、評判の。ついまだ掛違いまして手前お目通は、仕ったまで 「それが、」とその時、 頭はずッと合点んだ顔をして、

らねえが、源坊が下駄と来ちゃあ当時名高えもんだ。むむ、

名高えもんだよ。」

時の芸妓に、若干か自腹を切らせたなあ、大したもんだ、ど「馬鹿あ言え。畳、算より目の子算用を先に覚えようという今

思わず上から手で押えて、

れちょっと見せねえ、よ、ちょっと拝ませねえかよ。」

頭、これですか。」

- その芸妓の達引いたやつよ。」

「可いやな、見せねえ、見せねえ、一番御灯明を奉ることに 「へ、何、下らないことを、」と内々恐悦で、少し含羞む。

しようぜ、待ちねえよ。」 と言い懸けて向直り、左側の焼芋屋の店へ、正面を切って揺

しくば買いに来て見よ川越の、と仮名書して、本場〇焼俵藤助いで入る。 この店は古いもので、 取つきの行燈に、 ―― おい いで入る。この店は古いもので、取つきの行燈に、

ーとなん

「父爺さんや、」で頭は無造作に言を懸ける。

ぶつぶつ、……ものを読んでいた声がはたと止んで、破行燈

の灯の射す土間の上の一枚の古障子を明けて、 「誰だい。」といった藤兵衛は、匍匐になって、 胸の下に京

本の上に置きながら、頬杖を突いたままで、皺面をぬっ! 伝の読本が一冊、悠々と真鍮環の目金を取って、読み懸けた

「俺だよ、へんちっとも珍しくねえ。」

「おお、頭。」

「用じゃあねえんだ。とっさん少しばかり店を貸してくんね 灯が欲しいでの。」

「何か、灯ッて、その燻ぶり返った釣洋燈のことかい。」

「そうよ。まあ、」

「御念にゃあ及ばねえこッた、 内証の文でも読むか、

「いんや、質札だ、構わっしゃるな。寒いから閉めてくんな。」 戸外に向って、

「頭、煖んなさい、」と、竈、の後から皺嗄れた声を懸ける。風で突立ってるんだ、いじけるない。」 「源坊、こっちへ入らっし。おい、何を茫然石地蔵を抱いた

「おお、入れ黒子のしなびたの、この節あどんな寸法、いや、

寸伯か寸伯か、ははは。」

てかてか てかてか こくるりと廻った、頭の法然天窓「豪儀だな、そいつあ、」とくるりと廻った、 かしら ほうねんぁたま 「串、戯じゃあない、ちょうど一くべ燻べた処だ、暖けえよ。」

は竈の陰に赫々して、

「よ、まあこっちへ来ねえ、松の鮨の兄哥、 強いられて、源さん止むことを得ず。 入れッてことよ。」

「御免なさい。」

「さあさあ、」と婆さんも七十ばかりだが如才ない。

九

の方だったから、情人を達引くのに、どうだ、こういうもの「聞きねえ、婆さん、御前なんざあ上草履で廊下をばたばた んじゃあねえか。」 は気が付くめえ。 豪儀なもんだぜ、こら、どうだ素晴しいも

が私生児を引放して、片足打返して差出した。 頭は籐表を打った、繻珍の鼻緒で、桐の柾という、 源次

「どうしたんだね、」 「ねえ、こら。」と引くり返して鼻緒を掴んでちょっと捻る。 と婆さんは膝に手を乗せて、蹲まったま

頭は大袈裟に、

ま呆れて見ている。

治の武者修行をした大坂家の抱妓な。」 すんだぜ、お前も知ってるだろう、一昨年の仁和加に狒々退「どうしたどころかい、近頃評判なもんだ。これで五丁町を踏鳴

゙蝶吉さんかね。」

「うむ、 この節あ数寄屋町に居らあ、 あの跳ッ返りめ、 お先

> らったな。 式に習いたいというので、 て使うんだからッて、それ痛い目に逢わないだけにして、 走りで、何でも来いだから、仁和加の時も、一本引ッこ抜い お前ンとこの藤さんに仕込んでも

も鳴すことその通り。 仲之町を縦横十文字に鳴して歩いた。ここにおわします色男 かで、朴の木歯を引摺って、ここの内へ通っちゃ、引けると 面小手で竹刀を引担いでお前、 稽古着に、 小倉の襠高 が何

を銜え、腰なる両提ふらふらと莨を捻る。 た。頭は竈の前に両足を拡げながら、片手で抜取って銀煙管 驚くじゃあねえか、この下駄だ。」といって、また引くり返し て、それ、お歳玉に内証だよ、と遣りゃあがったんだとよ。 ったり、学校の生徒に引張り出されちゃあ田圃でぶらんこをそれがだな。あのお茶。ぴいめ、ついこないだまで竹馬に乗 していたっけが、 どうだい、一番この男とおっこちゃあがっ

鼻の形と、件の下駄と交る交る見競べて解せない顔附 源次郎のせめてそれだけでも止して頂きたい、目金を乗せた 知ってるほど、おっこちたと謂わるる男、すなわちこれなる 「おや、」といったきり、婆さんはかねてその蝶吉というのを 頭は悠然と煙を吹して、

言ったっけな、んんどうだろう、うむ、豪儀な。」 「何しろ素晴しいもんじゃあねえか、可恐しい。幾らだとか

んも近々と目を寄せて、 言いようが余り業でや 々しいので、取合う気もなかった婆さ

「頭、こりゃ今の流行かい。」と老いたる事をまじまじと言う。 これを聞くと叱るがごとく

う源坊、若い中だぜ、年紀は取るもんじゃあねえの。ここに 居る婆さんは、これでも仲じゃあ葛の葉といってその昔は売 「これ庫の七戸前も嘗めた口で、何だい、その言い種は、こ

「止しねえな、見っともない、」と穏に微笑んで目を外した、 ったもんだ、ずうっとそれ、」

「旧の直で二朱ぐらいか、源坊、幾らだとかいったっけな、もう仏に近いのである。 二両二分。」

「頭、三円、」といって、件の鼻を仰向にして澄す。

「ああ、三両二分か、何でも二分という 端 だけは付いてると ちょっ

店賃だ、可恐しい、豪傑な。」と熟々見ながら、うっかりしたたなきん 聞いたよ。そうか、三両二分か。ふ、豪儀なもんだ、 ヒなラヒィ ホキモス っくづく こ間なら一月分のとした碁盤より直が張ってら。格子戸で、二間なら一月分の

源次慌しく

下駄の肚で吸殻をとん。

「ほい、これは。」

さかと思うから、うむ、可いとも大川へ流しッちまえ、とい 那がずッしり重量のある紙入をこれ見よがしに預けるとな、肯 ったが災難、仲店で買物をして、お前紙入は、というと、橋 かない気だから、こんな面倒臭いものは打棄っちまうよ。ま 「しかしどうも可恐しい気前だぜ。もっともあの蝶吉といや いつかも客に連れられて中の植半へ行った時、お前、 旦

> うほど、頭が為振を見て、婆さんはこの年紀になってもそのこんな下駄を(しかねめえ。)というほどの事はあるまいと思 たとよ。そうだろう、二百円足らず入ッてたんだそうだ。 の上から打棄ったと言わあ。本当か、とばかりで真蒼になっ 瞼の黒い目に、逸疾く仔細があろうと見て取った。 それだものこのくらいな達引はしかねめえ。」という、高が

「如う、もう沢山だ。」「如う、もう沢山だ。」 構で、源次も何となく気がさして、少し不安心になった、引 構で、

気可愧しそうに装って、もじつきながら、出して取ろうと

した手を、外して持更え、

え。落語家の言種じゃあねえが、なぜ帰宅が遅いんだッて言 度胸があるんじゃあねえか。」 われりゃあ、奴が留めますもんですから、 「遠慮をするなッて事よ、何もはにかもうッて年紀じゃあね なんてッたような

「なにまた詰らないことを、」

伝が家の帳場格子の中へ突込んで見せたというぜ。」と風見の されるもんか、この間もお前、脱いだやつを持って上って、 鴉がくるりと廻って、少し北風が吹いて来る。 「それでなくッて、どうしてお前、これが長火鉢の上へ持出

言って、したたかに気を替える。 「その時ぶん撲られなかったのが目っけもんだ。」とずッきり

「何だってね、」 ひやりと応えて、

「婆さん、もう一燻燬とやりゃどうだ。」

、頭は素知らぬ顔をして嘯きながら、揃えて下駄を掻掴といいながら突込むように煙管を納れた、仕事に懸る身構

としては遣損い、目色を変えて、 くような手つきで、 形勢穏ならず、源次は遁足を踏み、這身になって、 ちょいと出し、 ちょいと引き、 取戻そう · 掻が裂さ

悪いぜ。」 「跣足で駈出しねえ、跣足で。それが可いや、可恐しく路が「頭、何ですから、急ぎますから、」

「穿いて行きますよ、よ、穿くんまた一当当てられて揉手をして、

の。 穿くんだから、 頭失礼ですが、そ

え、なあ、源坊。」 奴があるもんか。 「穿かねえでさ、下駄は穿くに極ったもんだ。誰がまあ頂く だが、それ懐へ入れる奴は無えとも限らね

「私 ゃちっと何だから、これから少し急ぐんですから、」

「どこへ急ぐんだ。どこへ、」

と捨鞭で歌を読むような見得をいった。 「ええ、ちっとその、何で。これから発句の会があるんです。」

をつけるが可いぜ、おいらが一番下駄の火葬というのを遣っいや俳名よ。待ちねえ、お前なんざあ俳名よりその戒名の方 「発句の会、ああ、そうか。源、何、何とか云ったな、その戒 名、 先きへ引導を渡してやろう。」

馬鹿め、 跣足で失せやあがれ。」

通う神

+

て来たようだが、神月君。」 「おやおや、酷く曇ってるなあ、 何だかこれじゃあ君を送っ

竜田は校内の園を抜けて、弥生町の門を出ようとして空を

見たのである。

言われて、ただ打一頷くのは神月であった。 だ、よく考えて軽しなことをしたもうな。」と年下の友に熟々もう失敬するよ、それじゃあ君、議論は議論だが実際は実際 「一所に散歩をしようと思ったけれど、降りそうだから僕は

「それでは。」

を詩を唱ったが、低唱してやがて聞えなくなった。 「えッ。」といって何物か身を開いて退って神月の姿を透し、「えッ。」といって何物か身を開いて退って神月の姿を透し、 「失敬。」と言い棄てて、竜田は門から引返した。暗がりの中 梓は彽徊して歩を転ずる、向から来て、ぱッたり。

うな豪傑の頭を対手には文句も言われず、居耐らなくなった くり返るようだが、むずと胸倉を取られると、目の玉が出そ 愛想尽しを、頭の口から、 んつくを啖って面目を失ったが、本人に聞くより一段情無い って可い大事の駒下駄を、芋を焼く、竈、に焚られた上に、けこれは松の鮨の源次郎で、蝶吉から頂いた、土付かずとい 「よ、先生か。」と冷評すような調子で言った。 お穿物という謎まで聞いて、色男堪忍ならず。胸は しかも意見するごとく言い聞 ひッ かさ

恋の仇。恋に上下の差別がないから仇に上下の差別はない、で、追廻す蝶吉がまた追廻す探索は届いて、顔まで見知越のが、自分から顛倒していて突当った人を見ると、蛇の道は蛇処を、煙に燻されて泥に酔ったように駈出して来たのである、

から突当ったらな、そっちからあやまって、通るこッた。人だい。知ってていわないのはお慈悲だと思うが可い。こっちじゃあないか、お政府へ知れて見ろ、二人とも、泥を噛るん「ふん、色男も凄じいや、汝が孕ませた児を堕されりゃ沢山学士神月梓である。むかッ腹立の八ツ当りで、

いたが、と影の添うがごとく七八歩、学士に添って逆、戻をして歩をつけ、学者もそれで沢山だい、色男万歳だな。」

後を見も返らず、取るにも足りない下司の雑言と思ったから。した。学士は歩み悩んだ様子で、ふと足を留めたがさすがにい、七面鳥の文学士。」と悪たれ口を吐き棄てて擦違って駈出「ざまあ見ろ色男、面が見てえや、青いのか、赤いのか、や

二ツ三ツ。 空を見ると雲低く、ひやりとして頬に 雫、 またばらばらと

く、かなたこなた身を交して歩いた。「ああ、」と弦いて、あたかもこの雫に懸るまいとするごと

がて、瓦屋根に当ってまたばらばら。 最初はただ、廂 溝などを 幽 に打つ音のみであったが、や

「厭だな。」

また途絶え途絶えしている内に、一斉に木の葉に灌ぐと見え見る見る繁しくなって、颯と鳴り、また途絶え、颯と鳴り、

神月は見えなくなった。て静な空は一面に雨の音。

紀の国屋

H

って、柳の彼方の黒塀の前に、頬(冠をした二人が在った。く受取る。その腕車に乗ろうとする時、かちかちかちと木を拍「こちらへ、」といった車夫は小腰を屈めて、紺蛇の目を手早

楫棒を越そうとする。

懸けたので、腕車の蔭に立停る。 「へい、御贔屓を一両名、尾上菊五郎、 沢村源之助。」ト声を

端を開けて、廊下へ出た。植込の 梢 がくれに、 「あいよ、」という声、捻った紙包が宙を切って、スト゚ロンテャネス゚の釘 その時、板塀の上なる二階の障子へ、明るく影が映ったが、

を掠めてはたと二人の前に落ちる。 「ええ、鼠小紋春着新形。神田の与吉実は鼠小僧次郎吉、「ええ、ねずみごもんはるぎのしんがた。神田の与吉実は鼠小僧次郎吉ち **傾**ば 城ば

松山、」ちょっと句切って、

身性と聞いたらば、お主ゃあ厭になりやしねえか。」いわば野暮な盗人だが、知らねえ先あともかくも、こういう 千葉、三浦、当時一 﨟別当の工藤などへは二三度入り、まぶ「鎌倉山の大小名、和田北 条をはじめとして、佐々木、梶原、「鎌倉山の大小名、和田北 条をはじめとして、佐々木、搾じやら どじゃあ、盗んだ金を置いて来た、悪事はするが義理堅え、 事あなかった。その替りにゃあ貧乏と、その名の高え曾我な な時にゃあ千と二千、少ねえ時でも百や二百、仕事をしねえ

、「)『縁ぎのどてらが着たく、御新造さんや奥さんと、高髷より、つぶし島田に結いたい願い、御殿模様の文字入よさんといわれるのが、ちいさい時カら和*タタし「ジト」 て勘当うけ、お前の女房になった私、どんな事があろうとも、 いわれるよりも内の奴、内の人かといいたさに、親をば捨て 「何で厭になるものかね、これもみんなその身の好々、 お嬢

婦、」菊「夜盗を働く鬼の女房に、」源「枕探しの鬼神とやら、」 さず、」源「お前と一所に居たいのは、、譬にもいう似た者夫 菊「そんならおぬしゃあ盗人と、知ってもやっぱり愛想も尽か 何で愛想が尽きようぞいな。」 「そういうお主が度胸なら、明日が日ばれて縄目にあい、」

> うら若い清しい声。「紀之国屋(引)」と思いがけず、暗がりの露地の後の方で、「紀之国屋(引)」と思いがけず、暗がりの露地の気があった。 野末に、」菊「身は捨札、」源「思えば果敢ない、」 源「お上のお仕置受ければとて、」菊「隙行駒の二人連、」源 「二本の槍の二世かけて、」菊「離れぬ中の紙、幟、」源「果は

十 三

たと見えて、ふらふらして仮色使の背後に立って、「紀之国屋!」とあてもなく漫ろに気の冴えた高調 「ほほほほほ、」と蓮葉に仇気なく笑ったが、再び、

て黙って呆れる、 「嬉しいねえ、」 といいながら、 女は罪もなくまた笑った。 無遠慮に一ツその一人の肩を叩く。吃驚し

「ほほほほほ。」 と二階の欄干に凭懸ったのが、思わ

ず威勢よく声を立てた。

「おや!

お蝶さんだ。」

「今晩は。」 振仰いで、

に姿が消えた。 「神月さん参りました、 来たんですよ。」と言ったが障子の中

度胆を抜かれて、茫然した仮色使は、「へい難有う様でございます。」 かえって背後に立ったのに礼をいって、 慌てて見当を失った

「さあ、」

「おい。」

」)に、ほよい、このではいる。 踵を廻らすのを見も返らず、女は身を 斜 にまた蹌踉けて、

門口で、柳の下を抜けようとした。

「関う」

「蝶ちゃん、」

「はい、」

「お気を付けなさいよ。」

「才ちゃんかい。」

「お楽みだね。」

とひらりと乗る途端に楫棒を取った、腕車の上から、

「さようなら。」

「チャチャチャッチキチッチドンドン。」軽く柳の枝の垂れた尖

を細く指で叩いて見せる。

がら面を背ける、途端に車夫は曳き廻らした。暗夜の小路を「ふん、」とばかり腕車の上で。見ぬようにしてちょっと見な

「チャチャチャッチキチッチ、」と低く口吟みながら、看板は、これ流星のごとくに去んぬ。

「よくねえ、」と声を懸けて、逸早く今欄干に立 顕れたそのをがらりと開けると、同時に 框の障子を開いて、格子戸「チャチャチャッチキチッチ、」と低く口吟みながら、格子戸

た対丈襦袢、これに、黒地に桔梗の花を、白で抜いた半襟な二枚襲ねて、もみじに御所車の模様ある友染に、緋裏を取っの打合せの帯、滝縞のお召縮緬に勝色のかわり裏、同じ裾をあつけは濃いお納戸地に、金で乱菊を織出した繻珍と黒繻子らし出されたのは、下谷数寄屋町大和屋が分の蝶吉である。女中が出迎えた。帳場の灯と御神燈の影で、ここに美しく照女中が出迎えた。帳場の灯と御神燈の影で、ここに美しく照

洗髪の潰島田、ばっさりしてややほつれたのに横櫛で、

自慢の姿である。 口紅ばかり、小肥して痩せてはおらぬが、幼い時から、踊がい、眉の間に、のない、年紀はまだ若いのに、白粉気なしの金脚五分珠の、簪をわずかに見ゆるまで挿込んだ、目の涼し意感にぶた珠の、簪

あれらいごさらりませいかい 出迎えた女中は前へ転ったと思って 慌 しく身を開いて、

「あれ危いじゃありませんか、」

「今晩は。」しめて立った。ほッという酒の息、威勢よく笑って、しめて立った。ほッという酒の息、威勢よく笑って、障子に打撞かろうとして、肩を交し、退って、電燈を仰いで、踏、蝶吉は『蹼』くように駒下駄を脱いで、俯向けに蹌踉け込んで、

段階子

_

「蝶さん、巻らせますよ。」と帳場から呼んだのは女房である。「蝶さん、巻らせますよ。」と帳場から呼んだのは女房である。「蝶さん、巻らせますよ。」と帳場から呼んだのは女房である。「蝶さん、巻らせますよ。」と帳場から呼んだのは女房である。「蝶さん、巻らせますよ。」と帳場から呼んだのは女房である。「蝶さん、巻らせますよ。」と帳場から呼んだのは女房である。「蝶さん、巻らせますよ。」と帳場から呼んだのは女房である。「蝶さん、巻らせますよ。」と帳場から呼んだのは女房である。

はないけれども、 あえてものの三角形が秘密を守るものだという数学の原理 歌枕の女房は目の形が三角である。鼻が三

指環を嵌めた手を長火鉢の縁から放し、座蒲団を外してふわゆがのでいる。白ッぽい糸織の羽織の裙を払って、金の平打のった頬骨の出た三角を、逆にして顔の輪廓の中に度を揃えて角で、口が三角、眉を払った痕がまた三角なりで、"頤"の細角で、口が三角、眉を払った痕がまた三角なりで、"頤"の細

りと立つと、むッくりと起きた飼犬が一頭。

り、蝶吉の裾を掠めて、取着の階子段へ、矢のごとく駈け上真 鍮の首環をがちゃがちゃと鳴らして、さらさらと畳を渡

った。

のを見ててっきり二階へ上るのだと目敏く先へ立って飛出し 待っている風情。 たのであるが、段を六ツばかり駈上ると、 この犬、一挙一動よく主婦の意を知る、 今その座を立った 振返って猶予って

三角の主婦は悠々として、

一さあ、 お二階へ。」

お早くいらっしゃいな、」と傍からまた女中が促した。 蝶吉は雨の朝。桜の色しっとりとして、、瞼に色を染めなが

ò

「可いのかい、ちょいとそんなことを言って、」「厭ですよ、」とすねるように言って肩を振った。 「どうせね、」と主従が澄して莞爾して左右から顔を覗くと、

犬が恐いのよ。」と段階子を見込んで笑う。

と出して、指をさすと電気を感じたようにくるりと廻って、 飼犬を見上げながら、左の手を袖の中へ引込ませて、ちょい 主婦はつかつかと前に出て、目をきょろつかして伺ってる

小犬はちょろちょろと駈け上る。

「可けない!

て、ばったり俯向に転った綺麗な体は、結えつけられたようというが疾いか、段に片足を上げて両手を支く、裾を引い に階子に寝た。

「危い。」

はそのまま腕を伸して、「あれ、」とけたたましく諸声に叫ぶのを耳にも入れず、「あれ、」とけたたましく諸声に叫ぶのを耳にも入れず、 「不可ません、不可い、不可いよ、」と蹌踉ける足を引摺って、

「おいで。」

「畜生、私より先へ行くッて法があるかい。」

の膝に乗って、畏った。ず衝と飛込み、いきなり梓の、袂に前足を掛けて、 上口の処で、くるくる廻っていた飼犬は、呼ばれて猶予われている。 と膝を軽く拍って、振返ったのは梓である。 ひょいとそ

「不可いッたら! あれ。」

士五

ら、」と袖を飜して、 すかない、何だ手前は、」ふらふらするのを踏こたえて、 憂げであった。 「誰に断ったの、畜生、こっちへ来ないかい、打ってやるか 「失敬な奴ぢゃ、てッたような訳だわね、不都合だよ、 手を挙げたが、そのまま立ってるさえ物 いけ

梓は俯向いて、犬の天窓をこれ見よがし。「誰が打たれに、……」

「厭よ、厭よ、私は厭ですよ。 そんなもの、打っちゃらかし

ておしまいなさいなねえ。」

「恐いな、どこかの姐さんが、 打っちゃらかしておしまいな

「焦れッたいねえ。」さいなねえッて言ってるよ。」

梓は笑いながら犬の前足を取って伸すと、飼犬は口を開け

て、目を光らして、 わッ!

「悔しがってるじゃあないか、」 と横顔を見せて振向 いた。

「なぜそうですよ、言うことをお聞きなさいなね、 ええ焦れ

ったい、」

地蹈鞴を踏んでも澄して取合ないので、

悔しい。」

るように壁に手を縋って、顔を隠して吻という息を吐いた。っくり膝が抜けて崩折れようとして、わずかにこらへ、掻挘と撲り付けて体を揉む。酔ってる処へ激しく動いたので、がと横を向いて上口の壁を、構いつけず平手でどんどんどん

「どうしたんですよ、」

階子段を上り上り、主婦は物音を怪んで来たのである。

「おや、おや、」

が先へ来たって何も仔細はなかろうじゃないか。」 「言句ばかり言ってるさ、構わないでおくが可い。 なあに対きる

゙゚おいで、おいで。さあ、゙゙゙゙゙

わッと吠えて前足を立てた、

「そのことなんですか、まあ、

飛んだ難かしいこと、トン!」 トンは飼犬の名であろう。

可いよ、おかみさんこっちへ。」

でもまた奥様がその何ですから、 おほほほほ、」と主婦は三

「厭です。」

角の口を丸うして笑って控える。

「何を、詰らない。」

はい、 はい。」

くその心を得て、前足を下して尻尾を落した。扁い犬の鼻と、 膝に手を垂れ、腰を屈めて、戯に会釈すると、トンはよ

「おお、可し、可し。」二ツばかり頷いて、「それではお邪魔主婦の低い鼻は、畳を隔てて真直に向い合った。

を致しましょうか。」

同時に、ど、ど、ど、ど、どんと床板を踏鳴して、

主婦は驚いて退って、「厭!」厭よ、」と壁の 厭よ、」と壁の中から唐突に声を出した。

「まあ、済みません、どうも。」 蝶吉は振乱すように壁に押着けた島田髷を揺ぶって、

きますねえ、」 一泣いてるんだよ、 おや、ま、どうしたッてこッたろう。驚

「しようのない嬰児ちゃんだよ。」と平手を二ツ乳の上へあて、目

訳もなく振払って、 「さあ、あなた、」とこれもちゃんと極って背に手を掛けると、 「どうにかしてやっておくれ、 梓は膝からトンを掻退けて、 面倒だから。」 座も言葉も更めて言った。

-17-

に、 「拗るもんじゃあありません、あの方が来ていらっしゃるの 何が気に入らないで、 じれてるんですよ、 母様は知らな

いよ。」 といって一つ打つ。

痛いよ、」

嘘ばッかり、」

厭よ。」

「姐さん、」蝶吉は身顫して、「何が厭なんですッてば、 ţ 焦れッたい人だ。ええ、」

「才ちゃんは疾に帰りました、 居やあしませんよ。 さあ、 さ

もう聞かなきゃこうして、」

「あれ。」

を抱いた。 蝶吉が身悶 するのを、 主婦は構わず擽ったが、 吃驚して肩

「おや、本当に旦那、本当に泣いてるんでございますよ。

んただもう嬉しがってるんだろうと思うもんだから、 忍して下さい、堪忍して下さい、悪かったよ、どうもお前さ 知

った様子で、麗艶に微笑んで、と、真赤になり、可愛い目を細くして、およそ耐らないといと、真赤になり、可愛い目を細くして、およそ耐らないとい極めて後悔し、そのまま首を伸して、肩に搦んで顔を覗くをめて後悔し、 らないで、飛んだことをしたよ。済まなかった、」

月の横顔を流眄に見ながら蝶吉は莞爾する。 「嬉しい!」とばかりで斜に顔を向けて、 主婦の面 神

払って立直る処を、両手で背後から突飛ばした。 いわ、 「擽りッこなしよ、私はもう擽られると死ぬんですから、 、一番恐いことよ。」といいながら澄して壁を離れ、

たが、男の傍。 蝶吉の体は源之助の肖顔画が抜出したようになって、主婦の壁には薄り、呼吸の痕と、濡れた唇が幻にそのまま残って、「可憎しいッたらないんだもの。」 突入れられて、足も溜らず、横僵れになっ

を染めた友染の長襦袢は、 ろうとしたが、支えかねて半面を隠して倒れた。 れて媚めかしい。 あたかも好し、 梓の膝を枕にして、片手を逆に支いて起上 かわり裏のしどけない 件 の御所車

男は懐にした手を出しもやらず、 眉を顰めて、

「何だね、その形は。」

「可くッてよ。」

「可かあない、かみさんが見ているよ。」

堪

「可いのよ、ねえ、おかみさん、」

も異なものなり、 も異なものなり、そのまま階子段へ引退るも業腹なりで、お「どうですか。」と極めて慎重に答えた。主婦は心なく飛込む

めおめと見せられる。 「不可いッたッてしかたがない。」

とその玉のごとき手を畳に、はったり。

私はもう草臥れたんです。」

しようがないな、おい、ちゃんとおしよ、」と揺り落 梓は邪険に肩を振った。

「あら、髪がこわれてよ、」と少し横になって、蝶吉は片手を

上げて仰向けに梓の胸を押えて、恍惚して嬉しそうに、 「鬢のほつれは枕の咎よ――あれさ、じっとしていらっしゃ

い。後生だから、_

振落そうとする。 「構うもんか、怪しからん。」と男はわざと叱るように言って、

装った、 蝶吉は目を誤って、口をしめ、眉を顰めて、さも切なげに

「頭痛がしてよ、頭痛が、天窓が痛いのに、酷いことねえ。」 嘘を吐け、」

に足踏をした。
「あなた、擽っておやんなさいまし、」と主婦は焦れったそう

黙って主婦を見たが、神月は下を向いて、

ってその騒々しいといったらないもの。」 「止そう、見ッともないから、擽ると最後、 きゃっきゃっい

「おや、いつも擽るんだと見えますね、あなたは。」

飲むさ、こっちへ来て。」神月はこれをキッカケに片肱をちゃ ぶ台に支いて、やや所在を得たのである、しかたのなかった 「え、何、下らない、何を言ってるんだ。まあ、おかみさん、

懐中の手は、猪口を取って、ちょっと上げて、

ですよ。まあ、串、戯は止して早く、拵えさせますから、寝か 「いえ、頂きますまい、そんなことでごまかそうたって駄目

してお上げなさい、本当に酔ってるんですよ、全く苦しそう

に

主婦は一切呑み込んだ顔附であった。神月はそれとはなげまかみ。

「直ぐ帰るんだから、何だよ。」

くりと跳起きて首輪の音をさして座敷からつッと出た。 ぶ台の片隅に、蹲って、洋燈の影で見えなかったトンは、 から立っていたままで、二階を下りようとする、途端にちゃ 「ですから誰もあなたにお休みなさいとは申しません。」 と悪く切口上で、別にお燗を見ようともせず、上 口に先刻

「どこでそんなに酔わされたんだ、よ。」

て、手をその小さな女の胸に置いたのである。 神月は期せずして主婦を下に去らしめた、件の猪口を棄て

「存じません。」

「解らなくッてよ。」「存じないことがあるものか。」

そうに瞶めている。 とした品の可い、 した品の可い、取って二十五の少い顔を、しげしげと嬉しといって清しい目をぱっちりと開いた。蝶吉は、男の、凜

んで来た、それなら知ってるだろう。」 「それじゃあ、酔わされたんだとはいうまいから、どこで飲

んだが、固くちゃんとしているので、指尖にかからない、絹 していらしちゃあ……。だって少しばかりなんですもの、」と いい懸けて目を外し、枕にしている神月の膝を着物の上から撮 「あなた、また叱ろうと思って、厭よ。そんな真面目な顔を

ぐって莞爾して、 布に皺を拵えようと、抓るでもなく、撫でるでもなく、爪さ

大丈夫さ。」 「可いじゃあありませんかねえ少しばかり、儒なんですもの、

歩いた。杯は一個横になって、飲みさしが流れていた。あえへ押遣ると、銚子が袴を着けたままで、盤の上をするすると てこれを細く断る必要はないけれども、ちょうどその銚子が ゃあ甘くも辛くもない、何も難しいことはありません。」と向 うものか、酒はお前さんが飲むんじゃあないか、そしてお前 歩いた時、蝶吉が起きたからのことである。 さんが酔ったんだろう、芸者の蝶吉が酒に酔ったって、 「大丈夫? そうさ、また大丈夫でなくったって誰が何とい

「おや、異う仰有いますね、異なことを。何ですッて、」 梓の羽織の袖に、髷の摺合うばかり附着いて横坐になった 蝶吉は詰め寄りそうにしていった、梓は今辷らした銚子を 鹿爪らしく膝に手を置き、近々と顔を差寄せて、

けれども、」 「まずお酌でもして頂こうかね、お燗ざましじゃああります

「ふん、」と言ったばかりで澄して見ている。

の悪いのが出来上ったんですが、悪うございますか。」 です、蝶さん、ここに是非一番君のお酌をという、厄介な、心懸い 「いかがでございましょう、頂く訳には参りませんか、どう

の帳面につけておく。住所、姓名をちゃんと申せ、偽るとた

「はあ、随分宜しゅうございましょう。」 梓は猪口を拾って、杯洗の水を切り、

「結構な訳ね、宜しければ、どうぞこれへ、」

さんに酌をして欲しいと仰有いますのは、 「おやおや唯今内の人におことづけをなさいました、蝶吉姐 ちょいとお前さん

「 私 でございます。」

り酔わないように致せ、これ、女房がまた心配をするそうじ ゃからな。」 「おお、心懸の可い奴じゃ、宜しい。さあぐッとお飲み。

さよう心得るじゃぞ。」 「なくても今に出来ます。その心懸なればきっと出来るから、 「 畏 りましたが、一向さようなものはございませぬ。」

げに巡査の声色を佳い声で使いながら、打合せの帯の乳の下 かな。不心得な奴じゃ、その分には差置かれぬぞ。」と覚束なかな。不心得な奴じゃ、その分には差置かれぬぞ。」と覚束な 可哀そうに蝶吉が気ばかり揉んでいるわえ、なぜそうじゃろ ゃ。よくない奴じゃぞ。方々の女の子が皆で騒ぎゃあがるで、 ッて、気が置けなくッて、その癖頼母しい、き様は女、殺じ 殿様のようで、世話に砕けていて、仇気なくって可愛らしく とかがお出来遊ばしゃあがって、知った顔をしないでな、 つれ毛を掻上げた。その櫛を取直して、鉛筆に擬えて、 の膨らんだ中から、一面の懐中鏡を取出して、顔を見て、ほ 「コヤコヤ、いつかも蝶吉がお花札を引いた時のように警察 「一体、容子が可くッて、優しくッて、それで悪くまた学問 「はい。」

めにならぬぞ。コヤ、」と一生懸命に笑を忍んで、細りした 合って遊ぶ。意だった梓もあんまりだから、 頬を膨らしながら、唇を結んで真面目である。 最初は何か取

「何だ、馬鹿々々しい。」

じゃな。」 「コヤ、 巡査に向って何だ、 馬鹿々々しい、 き様は失敬な奴

「可加減にしておけよ、面倒臭い。」 蝶吉はちょっと膝を突ついて、

「よう、巡査ごとをしようよ、よう、可笑くッてよ。」

梓は叱る訳にもゆかず、 苦笑一番して、

「暢気なもんです。」

手鞠の友

れば、 ば、世に処してかかる待合などには出入すべき身分ではない。 風采と、秀麗なる容貌と、学識の豊富なるをもって聞えた、神月梓は学士である。同窓の朋友の間にも、その温雅なる。 梓は子爵家の婿君である。すなわち華族の殿様であって見れ 俊才で、且つ人魂と、流星と、意見の衝突以来、不快の念を抱続 ながら、 はない、立派に客たる品位を保って、内に疾ましい処がなけ いて、頃日夫人の許を辞して、谷中の寺に隠れたけれども、 もっとも地位あり、名声ある人の芸 妓 遊をせぬという 限がに まだしも世間は大目に見ようが、梓はさる身分であり 一待合の女房を見て、これを(おかみさん)といっ 温雅なる

> うのではない、お蝶さん、おまえさんは、という調子たるや、蓋 て自ら、謙り、相手の芸妓を捕えて、おいとも、こらともい

い。 し自ら、卑うしたるものだと謂わざるを得ぬ。 いの時、 少くとも青年の佳士、衣冠正しい文学士が、譬えば二人対向 人知れずであろうとも 独 省みて恥辱でないことはな

が、 育ったのである。 えばまず此方から挨拶をするもののように、余儀なくされて れてはいたけれども、未だ敬礼された覚がないので、人に逢 問屋の旦那にも、 の士官の奥方にも、 ぇ、豊なる家計の下に育ったものではなかった。 使 に行くしかるに、梓は旧仙台の 生 で、土地の塗物師の子であった 内へ注文に来る余所の小父さんにも、隣家 向の質屋の番頭にも、いつも、可愛がら

中から畜生呼わりをされる身で。 らず、女房にもならず、奥様にはもとよりなり、 従姉妹が三人、年紀の姉なると、妹なると、皆お嬢様ではおもまた同じ勤の止むを得ぬ境遇であったから、中の好い うのか、父の姉の子が一人、梓より年上であったのが、それ たのが、姉妹揃って苦界に身を沈た。前世の因縁とでもい も措かず夫が亡なったので活計を失うと、女の子が二人あっ 来た有名な芸妓だった、のみならず、これを便って同じ仙台 の土地へ後から出て来た母の妹夫婦も、また甚だ不遇で、 加うるに、その母親というのは、その始江戸から住替えて 揃って世の

の約束で他へ養女に遣わしたのが、年を経て風の便に聞くと、 梓の実の姉が一人ある。内の都合で、生れると直ぐ音信不通 母親は若死した、やがて父親も亡った。その遺言に因れば、

三人が竜の腮を探るような思をして工面をしてくれた若干 それと知りつつ今まで遂に音信なかった姉者人、その頃一豪 野辺の送が済んで、七々四十九日というのに、自ら恥じて、 それも一家流転して、同じく、左一褄を取る身になったという。 金とで、ようよう後、弔も出来たくらい、梓の家は窮してい 商の愛妾になっていたのが尋ねて来て、その小使と、従姉妹

花、簪の房を仕送れば、小な洋服が似合うから一所に写真をを持って来る、算盤を買って来る。本の栞に美しいといって、 取ろうといって、姉に叱られる可愛いのがあり。 入っていたその学資は、父が膏血を絞ったものであることは りに、一門の中からせめて一人、梓さんが男だからと、石筆 いうまでもないが、従姉妹達が銘々、自分の境遇を悲しむ余 もっとも小学を卒え、中学に入って、ちょうど高等学校に

ってるけれども、梓はかえって手鞠、追羽子の友を持ってい時分、梓は酷く男の友人に疎じられた。人は皆竹馬の友を持 たのである。 というのが出て来て、帽合で手を曳いて帰るので、八ツ九ツ 学校の帰途、驟雨に逢えば、四辻から、紺蛇の目で左褄

ず、年紀はようよう梓より二ツ上の姉が、両親の後を追って、 学校の業を卒えて上京した、学資は姉の手から――その旦那 の懐中からし 父親が亡って、姉が初めて訪寄ったのが機会で、梓は高等 出たのであるが、学年中途にして志未だ成ら

> 最後にその三人の従姉妹が、頭のもの、帯一本、指環を一清く且つ美しい一輪の椿、床の花瓶をほつりと落ちた。 なり、いま一人は人に連れられて北海道に渡ったという、音信 ツ売ったという、二十円余二月足らずの学資を達引いてくれ たまでで、あわれ一人は目を煩い、一人は気が狂ったように

があって、それなりけり。

であるが、可懐しく尋ね寄り、用あって音信れた、往くさきの暮、花の、楼、、柳の小家に出入して、遊里に馴れていたのという境遇であったので、幼少の折から、、紅の、曙、緑という境遇であったので、幼少の折から、 亭主に天窓を下げねばならない。 房に挨拶をせねばならず、奥に掻巻を懸けて昼寝をしている、 であるから、。勢、已むことを得ず、帳場に片膝立てている女 ざきは、残らず抱であり、分であり、いずれも主人持のこと

 ن و て己に従うものだと思うのは失敬であろう。履を取るはすな を取って送迎するのを見て、来客たるもの、 も、人の召使は我が召使ではない、玄関番の書生が、来客の履っ わち主公に使うるの道で、あえて来客に対する礼ではないか 単にそう云えば梓が酷く意気地のないように聞えるけれど 自家を尊大にし

癇癪玉を込めた、ドンを啖い、鳩玉で引退るに当ってや、客かんしゃくだま。ひきまが、はとまる、ひきまが世の賤業を営むものとおとしめて宜しいけれども、臂鉄砲にせの賤業を営むものとおとしめてよる。 貰われてのッけから、対手にされざるものにおいてをや。 に敗けたものと謂わなければならない、いわんや、さッさと まったるものは商となく、工となく、武となく、文となく、戦たるものは商となく、工となく、武となく、文となく、たたかい 弾け、飲め、唄え、酌をせよ、と命令を奉ぜしめた時ばかり、 芸妓も自家これに客となって、祝儀を発奮み、玉を附けて、ばりゃ

会釈をしなければならない数で。 が敬礼を受ける場合でなく、 忘八の亭主、待合の女房といえども、 己 遊客となってこれぼうはち 一個人としてここに訪い寄れば

ある。 忍ばるる処ではあるまい。しかるにこれを訴人して、後にざ 題の買って出ぬ役。廻であろう。 まあ見ろをくらって、のり血になって悶くのは、芝居でも名 道を聞いて、 れ蹈迷った時寸毫の害も加えられずして、かえって此方よりれい。 ても渠は姉さんである。たとい山賊といえども、 たとい、売淫婦といえどもその妹たるものは、 世を害するものなりといって訴人に及ぶは情において 麓に下りることを得たりとせんか、渠は恩人で 山路におの 淑女であっ

といえども、 たものは、皆苦労人であった。 母をはじめ、姉、従姉妹、幼時における梓が七情を支配 しかれども、 数の奇なるもの、 あえてこれ天下に 憚 る処なし 顧れば無慙な L

る。

湯帰り

<u>-</u> +

湯島もその見晴の鉄の欄干に凭って、 る天神下の一 梓が上京して後東京の地において可懐いのは湯島であった。 廓を詠めるのが最も多く可懐しかった。 升形の家が取囲んでい

はその母親の生れた処だということについてである。 あえて、ここで何等のことを仕出したことはないが、 可懐しさもまるで過世の夢をここに繰返すようなもので、 天神下

> なる大悲観世音の御姿を持ってるようなものが出来たのであ ば婦人が信仰の目じるしに、優しい、尊い、気高い、端厳微妙 ち、床しい、懐しい念のすべてをもって注ぐべき本尊、譬え にある時、それを形に現して、梓の感情を支配する、すなわ 雲の形を見るように漠然とした、幻に過ぎなかった。 むのが習であったが、恋しさも慕しさも、ただ青海の空の く姿寂しく、哀れさ、床しさが身に染みて、立去りあえずる 時、夜は殊に障子に鏡、立の影の映る時、いつもいつも心嬉し 左側に並んだ意気な二階家の欄干、紅裏の着物が干してある の住んだ家ではあるまいかと思い、宮の鰐口に縋っては、十 い 七八であった時の母の手が、これに触れたのであろうと思い、 されば故郷を去って独り寄宿舎に居る、内気な、世馴れな 、心弱い、美少年は、その界隈に古びた廂を見ては、母親 しかる

途中で会った友達夫婦が、一台の荷車の両脇に附添って、妻恋 て、鉄欄干に遣瀬のう時を消して暮方に家に帰ろうとする、 その日も梓は例のごとく、不遇の身を湯島の境内に彷徨わせ 一日九尺二間の城を明渡すの止むを得ざることに立至った。。ホッッ゚の 世話になったが、その主人また大の貧窮で店立を命ぜられて、 学資が途切れたので、休学して、しばらく寄宿舎を退いた間、 だ仏文の手紙の来ない先、姉が死んで、従姉妹が離散して、ちょうど玉司子爵の令嬢いまは梓の夫人たる竜子から、ま 夫婦で長屋を借りて世帯を持っていたいささかの知己の処に の下。通を向うから曳かせて来て、

に店借をしていた長屋に引返して、残りの荷物を纏めたが、 預けて来たんですから、車を雇って持って来て下さいな。) 自分の本箱やら、机やら、二人乗には積み切れないで、引越 と暢気なもので別れて行った。 。 意を了して、その頃同 朋

裏を抜けて、冒的の処へ行くと、さあ知れない。 天神下までは路も近し、洋燈を手にして宰領して、男坂の

車をまた一輛。

間抜だな。 提、灯の用意はなし、お前さん。その手に持ってる洋燈をお点。 叱言をいう。引返した処で寝る家もない場合。梓一人が迷惑 して困じ切っている処を、灯がないと、交番で咎められたが、 たので、間が抜けてるじゃありませんか、と曳子はぶつぶつ ぐるぐる廻ってる、日は暮れる、暗くなる、二三時もかかっ 差配にまでかかって尋ねたが、皆くれ分らず、荷車につい 向うが言い違えたか、こっちで聞違えたか、 と曳子は中ッ肚だから口の裡で、幾たびも、 覚えた番 地を て、

は伺います、莨屋の店でも少々、米屋の窓でもちょいともの荷車の前に立たせられて、天神下をかしこここ、角の酒屋で ると、雨が降出した。 から、噛着くように叱言をくッて、ほとんど耐え切れなくな を。いずれも知らない、存じませんな、 さるほどに神月梓は、暗夜、町中に灯した洋燈を持って、 を言わるるたび、背後

梓は蒼くなるまでに、果は気を苛って、 額がつッぱると思

> け、 叩きつけよう、そして粉微塵に砕けたら、石油に火が移って れに気が小さいから、取詰めて、持ってる洋燈をこの荷車に うほどな癇癪筋、一体大人しく、人に逆らわず、争わないだ めらめらと燃えて無くなるであろうとまで思った。これはし いつもは殺しておく虫があるのでむらむらと、来た。

の色も沈んだ米屋を背後に、此方を向いて悄然洋燈を手にし見た、早や戸を閉めた縄暖簾を洩れて二筋三筋戸外にさす灯 嬉しくッて耐らず、様子を悟って声を懸けた。 癇癪が高ぶって血も 逆 らんとする、若い品の良いのを見て 人見知をせず、年は若し、 台に抛むとする、眦の下ったのは蝮より嫌な江戸ッ児肌。 美しい眉も逆釣ッていたであろう。まさに洋燈を取って車の は真暗な出会頭。蝙蝠が一羽ひらひらと地を低くう飛んだと 24 十七の夏のはじめ、春の名残に降ろうとする大雨の前で、戸外て、しばらくこの近所にある知己の口入宿に遊んでいた。年紀 りと出たのは、蝶吉で、仲之町からどこにか住替えようとし て、鬢の毛を掻上げながら、滝の湯とある、女の戸を、から もすらりと見え、洗髪で、濡手拭、紅絹の糠袋を口に銜え 衣紋ゆるやかにぞろりとして、中ぐりの駒下駄、ポポヘ その時、黒縮緬の一ツ紋。お召の平生着に桃色の巻つけ帯、かねない少年であった。 てえんでる一個白面の少年を見たのである。梓その時はその かけかまいのない女であるから、 高いので丈

(ちょいとどこへいらっしゃるの、) 一幅の赤い灯が、暗夜を劃して閃くなかに、がらくたの い荷車と、曳子の黒い姿を従えて立っていたのが、

を持ったまま前へ出て、

のである。(家を探してるんです。)と内心に激したれば声も鋭く答えた

そこなんだわ。)といって、濡手拭で指をしてくれた。蝶吉いかみさんとが居る内でしょう。そうなの、それじゃあつい前垂を懸けた、肥った旦那と、襟のかかった素袷で、器量の可えだ。今日お引越なすったの、何でしょう、兵児帯をして、蝶吉は莞爾々々しながら、愛想よく仔細を尋ねて、蝶吉は莞爾々々しながら、愛想よく仔細を尋ねて、

あるのに、一棟の屋根も見えない、天神下のかくれ里。矢場が取払われて後、鉄欄干から瞰下しても、直ぐ目の下でになり、建連る二階家に遮られて、男坂の上からも見えず、この一廓は、柳にかくれ、松が枝に隔てられ、大屋根の陰

描ける幻

二 十 三

で、紙屑拾不可入、午後十時堅く〆切。古下駄等、汚物洗うべからずの総井戸と一般、差配様お取極古下駄等、汚物洗うべからずの総井戸と一般、差配様お取極さて件の花簪屋と煎餅屋との間の露地口の木戸は、おしめ、

つけて、ちゃんと心得、 られるのだから、木戸を閉切ったあとはこれが例、女房が見 のが聞えたが、重宝なもので、煎餅屋の店から裏長屋へ抜け く、あたりは寝て、切 通の方には矢声高く、腕車の疾く軋る の間を磨る音、男坂下なる心城院の門も閉って、柳の影も暗 った。木戸へ来ると、鍵がかかっていた。向うの湯屋では板 一样が引越してから五日目の夜、十時を過ぎて帰ることがあ

(書生さんの旦那、お穿物をお提げなすって、こちらから。)

と言ってくれた。

颯とする留南木の薫。顔を見合せて、であるいではなり、の明から溢れる緋の長襦袢が梓の手にちらちらと搦むばかり、美人とぱったり逢った。袖も摺合うばかり敷居で行違う。振美人とぱったり逢った。袖も摺合うばかり敷居で行違う。振り下駄を手に提げて裏口からはらりと入って来た、前日の極も悪し、面を背けて店口から奥へ抜けようとすると、同極も悪し、面を背けて店口から奥へ抜けようとすると、同

(失礼、)

(······)

だ答をしない中に、早やばたばたと戸外へ出たが、(ちとお遊にいらっしゃいな。)と言い棄てて、それでもま

に遊びに行った帰であった。ら、鈴を鳴らして入った。蝶吉は今夜裏なる常盤津の師匠の許ら、鈴を鳴らして入った。蝶吉は今夜裏なる常盤津の師匠の許(おばさん、お邪魔様、)と言いさまに口入宿の表の戸がらが

今こそあれ、、件の美人を梓は誰なりと知る由なく、ただか

朝 参詣

から、 ぜんときだっている。これではいるとを知った。 大都の芸妓の風俗、 の時と、 年紀のほども顔立もよくは分らなかったけれども、 その時と再度のみ。それもつくづく見たのではな 宛たるこの

梓はぞっとしたのである。

あった。そして天神下はその生れた処である。 あろうと思った。あえてここに更めていう、 感ずるあまり、梓は亡母が仮に姿を 現して自分を救ったので ら、事は小なりといえども梓は、大なる恩人のごとくに感じた。 しかも窮苦 極りなきに際して家を教えられたのであ 梓の母は芸妓で るか

うものを画に描いて、目にこれを見るような思がした。く古いのにつけても、もしやそれかと、梓はあたかも幻 母があたかもその年紀で、 心の迷うのも慕わしさの 余、しばらく住んでいた、 土の色も有の儘。これがむかし母親の住んだ家ではないかと の子が、打集うては遊んでいる、鞠唄も唄うている、廂、軒、 に接するがごとく感じたのである。 に肖たように思ってた折から、煎餅屋の店で行違った時も、 湯屋も古くからあるというし、 幾多の星霜を経てはいるけれども、かしこの柳、ここの て育ったの であろうと、 誰とも知らず、その頃の蝶吉を、 もしやそれかと、梓はあたかも幻とい その頃、同じことを、ここでして、 寺の門前のは今もあたりの女 あたかも前世紀の活きた映画 母 の ^{おもかげ} 破屋の太 それ 松

二 十 四

向合って御膳を食べる、窓から手を出して、醤曲を昔りよう友人夫婦は、疾くに引越して行方知れず、用もない処、殊に、 はない。入って見られず、伺うて分らなくなると、ますます可懐という狭い露地内へ、紋着の羽織でうそうそ入られたもので向合って御膳を食べる、窓から手を出して、醤油を借りよう 家の俤も偲れなくなった。構外を回って見るい、ケニ家主の都合か、かの隠家の木戸は釘附の〆切となって、家主の都合か、かの隠家の木戸は釘附の〆切となって、 になったが、遠いが花の香で、床しさはまた一入。 着く、湯島のそぞろ歩行は次第に日を措き、週を隔つるよう しさは増ったけれども、これまでと違って玉司子爵梓氏とな が開かれた。大方そこから旧の借家へ通ずることが出 とは方面の違った町の側、 竜子に迎えられて、子爵の家を嗣ぐ頃には、地主の交替か、 ってからは、
野を出入の送迎も仰々しく、往来の人の目にも であろうと思うばかり、 梓が大学の業を卒えて、仏文の手紙 いうまでもなく、先に世話になった 酒屋の蔵の廂合に一条仄暗い露地た。構 外を廻って見ると、今まで の姫、年紀は二ツ上の 醤油を借りよう T来るの -26-

御手洗の前で、桔梗連の、若葉と、幟と、杜鵑の句合の掛行燈。みたらし、きょうれんとのでは、これで、きょうれんで、その土地で、しかも湯島。詣の朝、神はその感情をもって、その土地で、しかも湯島。詣の朝、 したのである。 梢に残月の墨絵の新しい、

はその時もある意味をもって、 今日しも寄宿舎の紅茶会で、 蝶吉に助けられた。 竜田若吉が言ったごとく、

も知らず、落したのか、紙入というものを持合さず、水を注がは気にしないので、持って来たとも覚えず、忘れて来たと 文学士で玉司子爵夫人の恋婿でありながら、 (学士で玉司子爵夫人の恋婿でありながら、ちっとも小遣な些細なことだけれども、一体貧窮刻苦の中に育った人の、

丸々ッちい、幼い顔を出されて、懐を探るとない。 袂 に手を ごうとして干杓を取ると、 入れるとない。左にもない、帯の間にはもとよりない。 (水銭をおくんな。)と豆を装ってならべてある土器の蔭から、

思わず、どぎまぎして呟いた。

(どうした知らん。)

(水銭をおくんな。)

梓は極が悪いので、

で、自分には掏られたあてもないのである。 (おや、おや。)と疑わしそうに言ったけれども、 種の見得

子供は同じことを

(水銭をおくんな。)

(まあ、懐中を忘れたそうだよ。)

(水銭をおくんな。)

目をぱちくりして、

委細構わず、

拵えたような、小さな玩弄の緑の天鵝絨の蟇口を引出して、掌。に拡げて緋地の襤褸錦の紙入を開いた中から、指で環をの不断帯の間から、膨りと懐紙に包んだ紙入を抜いて取り、 が、朝参の婀娜たる美人で、罪もなく莞爾々々しながら、繻子顔を赧くして、立場なく後へ退ろうとする。背後に立ったの ただ六ツばかりの小児に対しても、梓は性としてこれ には

パチンとあけて、幼児が袂の中を覗くように、あどけなく

の小粒を、キラリと撮んで、向うへ投げた。

嬉しそうに、ぱっちりした目を細めて見ながら、

一片の、銀

(小僧さん、旦那様の分もあるんだよ。)

梓は屹となった。

美人は顧みて嫣然として、

(あなたや、さあ、手をお出しなさいな。)

たかも珠のごときを灌いで、颯と砕けると更に灌いだ、雫も 差出した、医師のごとく、爾く綺麗な手に、一杯の清水、 梓はここに到って、胸中まず後の謝恩を決しながら、 あ

切らせず、 (私のを使って下さらなくッて。)と落着いて、静に秋波 がに 視み

ていいながら、 ちょいと、 仰向 いて

端を引いた、奉納の手拭、 いまだ手摺もなく新しい。

吉――とある。

茶色の地に、

白で抜いて、

数寄屋町、

大和屋内

(姐さん、きっとお礼をする、)と梓は心を籠めてはじめてい

った。

(あら、何ですよ、)

と飛交わした。納豆々々の声 遥 に、人はあたりになかったの 堂の軒、宮の廂、鳥居の下、御手洗の屋根に留まった鳩が、 である。 あちらこちらしばしば鳴いて、二三羽、二人が間をはらはら (いいえ、)と押えて、そのまま別れて敷石の上を渡った。 この間二年余相たち申(候。歌枕の今夜の逢曳。

ちょう

蜀。魂、来って姿を宿すものが、ありのまま色に出るのである。 ることの極めて早い、むしろ鋭いといっても可い。この女の ばかりいたんですよ。」と急にまたしめやかになった。気の変 ッて、それにお前さんは久しくおいでなさらないし、鬱いで「ちょいと今夜は私嬉しいわねえ、こないだから蟷梅が悪く 梓も可懐げに頷いて、

いたけれど。」 「ついちっとばかり忙しかったもんだから、病気とは聞いて

「精出して勉強をしていたんですか。」

をした。 「ああ、」と何気なく答えたがふと気に懸った様子で浮かぬ顔

蝶吉はもとより何の気もつかないので、

「そう、生意気だねえ。」

「失礼な、人が勉強してるというのに、生意気だということ

があるものか。」 「あなたや、馬車に乗ろうと、いうんじゃあなし、詰らなく

ッてよ。また煩いでもすると悪いもの。」

「だって怠けてちゃあ食べられませんから、」

めて老実な色を装った。梓はこれを聞いて、何か気がさした 私が達引くから可いわ、」といって蝶吉は仇気ない顔に極

ような様子であったが、笑に紛らして、

「どうぞ宜しく、」

「ええ、それはもうね。」

語気で冷かにいって、屹と蝶吉を見た、目の中には一種の思います。 「しかし、私は駒下駄じゃあ厭なんだ。」と思い切ったという

を籠めたのである。

「おや、おや、異なことを、」といって、澄したもの。 蝶吉はさも思い懸けなかったらしかった。

梓はここに至って居住を直した。

すがに問い兼ねて当らず障らず。 おかしくないよ、お前、松の鮓は一体どうしたんだえ、」とさ 「いいえ、異なことをいうんじゃあない、隠し立をされては

ッてよう、初心らしいことをいって、可笑しいわねえ。」 「厭よ、やくのかい、貴方気に懸けるような対手じゃあなく

「何しろ、全くか。」

を気に懸けて下さるのは、あんまり可哀そうよ、蝶吉じゃあ 「だってもうそれっきり何だってあんな奴は何だろう、それの、」と俯向いて膝の上を、煙管で無意識に敲きながら、 「それはあの、何なの、だって私は何にも知らないんですも 「はあ、」と極り悪げに男と見合ってた顔の筋を動して、

ありませんか。」といって自らたゆげに見えて微笑んだ。

お腹の……」といいかけて、梓は我

「その事じゃあないよ、

「まあ、」

「貴方、誰に聞いて来て、ようどこから知れたのよ。」 黙って、俯向いてしばらくして、蝶吉は顔を赧らめ、

「なに少しばかり気になることを途で聞いたもんだから、つ

「もっとまだその上に知ってるんですか、」

蝶吉は驚いたような声

たよ。 ども、今来る途中で、松の鮨が、妙なことをいって当っ擦っをして、どうの、こうのと、詮議立をするんじゃあないけれ て、これでも色男に成済しているんだ。だから、何も洗い立て 好かれてると思ってる。ああ、ずっと惚れられたんだと思っ 男らしくもない、とそういうから、成程そうだと、自分極で、 と思っておいでなされば可い。いやに疑るのは見っともない、 る分には、好かれた者に違いはないのだから、好かれたんだ いたんだけれども、お前が見ッともない、たというそにでも のはお前がはじめてだ。商売だから嘘を吐くもんだと思って 「悪く思ってくれちゃあ困るよ、僕はね、知ってる通、遊ぶ 何とかいって、そうして好いた真似をして見せ

「厭だ!」

らた。んで、罪の宣告を促して弱々しく かったのを愧ずるごとき、荒ッぽい調子であったが、また自 蝶吉は閨を透見したものを、辱しめ、且つ自分のしどけな

「何か言っていましたか。」

残らず、」と神月はきっぱり言った。

`へい、」と真面目に、蝶吉はたちまち三ツばかりものの言い

ざまに年紀を取ったが、急に気を換えて、

さっぱりしたんです。 て。また田舎なんぞには当前だと思ってますとさ、私もう 「だって、すっかり快くなってよ。西洋じゃあ。皆平気ですっ

飲んだんですもの、祝ったくらいじゃあありませんか、不可やらで、内の姐さんが赤飯を炊いてくれました。そして一杯 くッて、え、え?」 体にも障らなかったといって、今夜ねえ、床上げやら、何

「よう、何を鬱ぐのよ、私のことなんですか、不可くッて、」 梓は急に語も出でず腕を拱いて黙然としていた。 蝶吉は梓が何か易からぬ面色があるのを見て、怪しむ様子。

可いも悪いもお前、」 言語道断だ。

を上げてまじくりして、 吉はぱっちりした目を細うして、下目使いで莞爾したが、 「だってしかたがないじゃあありませんか、」と詮方なげに蝶 顔

すから、余脈から貰うことにでもしましょうッていったら、 う一生子供は出来ないッていうのよ。ですけれども、貴方嬰児 だッて言ったんですもの。」 それさえ面倒だ、可愛い口を利かせるなら鸚鵡を飼えば沢山 が、父さん、母さんッて、生意気な口を利くのが可愛いんで だって言ったじゃあありませんか。ですもの、三ツばかりの児 はいらないんでしょう、ぎゃあぎゃあ泣いて可煩いから大嫌い 「もっとも何なのよ。一度そんなことをしたものは、もうも

梓呆れ果てて言葉なし。

-29

「ほら、御覧なさいな、可いじゃあありませんか、 私も嬰児

ない。

なんか欲しくないんですから、」

すがごとく、その胸に手を当てた。 と言い懸けて少し体を斜にして、秋波で男を見ながら指示

て食べるんだって、」とぐッと緊め附けて肩を窄め、笑顔で身顫してっちのお乳をお菜にして、 こっちの 大 い方をお 飯 にし 「こっちのお乳をお菜にして、こっちの大い方をお飯**

厭、 痛いわ!」 をして

二十七

梓は耐りかねて、

蝶吉は三指を支いて的面に潰し島田に奴元結を懸けた洗髪 の艶かなのを見せて、俯向けに畏り、 「お蝶、」とちと鋭くいうと、いつも叱るのを外らかす伝で、

は胸が充満、女が見ないので心の張が弛んだか、瞶めているて、笑いたさを切なく耐える風情。余りのことに気の弱い梓 呆れるのを、熟と瞶め 目にほろりとした。が、思切って、衝と寄った、膝を膝に突掛 けて、肩に手を懸けるとうっかりした処を不意に抱起されて、 「召しましたは何御用にござりまするな。」と男の仮声を造

と、愛想尽を言って舌を出した処で、ちっとも肚を立てはし を言やあ嬉しがって、色男が聞いて呆れる、ざまあ見やがれ たといここで、目の前で、やあい、欺してやった、二本棒め、殺したといここで、目の前で、やあい、炸り 事というものが分らないんだから、私は何にも咎めやしない。 「可哀そうだな、お前は不幸に生れて来て、何にも世の中の

> だとも何ともいわないよ。 いいえ、 たとい悔しくッて、 肚は立っても、 お前を不人情

不都合でも何でもなかろう。 れども、ちっとも知らないで言うことなり、 こうすりゃ薄情だ、不人情だと思ってされてこそ、 癪 だけ することなら、

のを引摺ってるといって、お前の豪がることも知っている。 は知ってるんだ。そしてまたここらの芸妓は綿のはいったも るもんだか、少しも知らない。通だとか粋だとかいうことは、 三が下るものやら二が上るものやら、節は伸すもんだか縮め を初心だ、坊ちゃんだ、 寒中、綿の入らない着物を着ていりゃ、体に毒だということ からももんじいで分らないけれども、意気だといって、この だから、何にも言わないが、その何だよ。お前は僕のこと 何にも知らないというそうだ。 -30-

ひそひそながら声と共に手に力が入ったので、蝶吉は赧らむ 赤飯を食べさせられて、酔って来るようになりゃ沢山だ。」と 愛なさも、仇気なさも、お肚を……可いかい、政府ながる。 可愛らしくもなり、ついこういうことにもなったんだが、 たんだ、面白いといやあ。慰。だ。それが段々嬉しくなって、 罪 てた耳に、お前が、 さえ他愛ないことをいうようにしこまれるくらいだそうだッ 間違って、馬鹿げていて、仇気ないのが可いとして、わざと ゃ罪人だぜ。人にゃあ交際も出来ないようなことをしながら、 てな、字引と首ッ引で、四角い字、難かしい理窟ばかり聞い ;のないことを言ってくれるのが嬉しかった。なに面白かっ 成程薄着ですらりとして、そりゃ姿は可いだろう。ものが 訳の分らない、他愛のない、 仇気な へ知れり 他

顔を外しもならず、呼吸を引くように唇を動かしている。

様子を見守り、

と思っていうから聞きな。」前は十九で、私は二十五。七ツ違いの兄さんだ。まあ、妹だも言う通、お前がお前だから何とも思いはしないけれど、お「可哀そうに、決して、それを責めるのじゃあない。さっき

下かた

二十八

つ呆れ、あわれにも情なくも思ったのである。口を、ここで聞正せば実際で、梓は思い懸けず、且つ驚き且といったのを、気にも留めないで聞棄にしたが、松の鮨の毒った時、蝶吉はそれとはなく、頻に子が一人欲しくはないかさればぞ思い当る。一月ばかり前の夜、同じこの歌枕で会

なる学理を発見したごとくにいうのを聞かせられた。歩いて、水を飲んだ、海水は塩ッぱいということを、さも大いはいかつて、蝶吉の仇気ない口から、汐干に行って、騒ぎ

尋ねられたこともある。ったが、私の顔は今でもおかめの面に肖ているかといって、ていると、追駈けて来た者が分らないで黙って見遁しては帰鹿囃子の中へ紛込んで、チャチャチャッチキチッチッと躍っま供の中悪戯をして叱られると、内を駈出して、近所の馬子供の中悪戯をして叱られると、内を駈出して、近所の馬

う奴には突当ってやるというから、何を弱虫、先方が怒ったその気であるから、蝶吉がおもてを歩いて、生意気だと思

でからざる同情の感に打たれたのである。

さらぬだに蝶吉は恩人である。殊に懐旧の情に堪えざる湯い、嬉しい情を支配された、従姉妹や姉に対するすべての思い、嬉しい情を支配された、従姉妹や姉に対するすべての思い、嬉しい情を支配された、従姉妹や姉に対するすべての思い、嬉しい情を支配された、従姉妹や姉に対するすべての思い、嬉しい情を支配された、従姉妹や姉に対するすべての思い、嬉しい情を支配された、従姉妹や姉に対するすべての思い、嬉しい情を支配された、従姉妹や姉に対するとい、とおしれない、もの心を覚えてから、可懐しい、恋しい、いとおしれない、もの心を覚えてから、可懐しい、恋しい、いとおしい、嬉しい情を支配された、従姉妹や姉に対するよっての情の焦点を繋が、場遇の斉しい一個蝶吉の身の上を悉しく知ってからは、謂うめているのであるから身にかえても不便でならぬ。

子持の母も芸で通り、馴染の座敷では小女が連れて来ると、っている内に、蝶吉は出来たので。これで根岸に隠れている中、時世といい、活計を失って、仲之町で根岸に隠れている中、時世といい、活計を失って、仲之町で根岸に隠れている中、時世といい、活計を失って、仲之町言い交した土佐の浪人とまだ江戸である頃遁げて来た。二人蝶吉の母親は旧京都のしかるべき商賈の娘であったが、よくは何となくよく似た身の上だと思った。

-31-

立って歩くようになると、根岸では、父が病の床に倒れたがせるという境遇であったが、誕生を済して、蝶吉がようやく背後を向いて、三味線を下に置いて、懐を開けて乳房を含ま

また起たなくなった。

った。は、乳母日傘で、かあちゃん、かあちゃんと言えるようになは、乳母日傘で、かあちゃん、かあちゃんと言えるようにな知の上落籍されて、浜町に妾宅を構えると、二年が間、蝶吉越えて三歳になる時、母親は蠣殻町の贔屓客に、連児は承

一十九

る。

しただけの金員耳を揃えて返せという。本がないので、心まで淋しくなり、蝶吉の母に迫って、その落籍い、妾宅の主人は大失敗で、落魄して、最後に一旗という資をれもしばらく、米屋町は米の上り下りで人間の相場が狂

けた、年期が十三年。だ償われなかったので、蝶吉を仲之町の大坂屋というのに預ら再勤したが、足りない金子は、家財を売って、それでもまをただ運命に任せていたので、いうことに逆らわず、芳町か蝶吉の母は根岸の情人が亡なってから、世を味気なく、身

そのせたげようと云ったら方外な。少々痛いおもいをさせてもという口約束をしたのであるから、かけてはいかなる手段をもって仕込んでも差し支えはない、薬の挽妓の慣例として、色はきっと売らさぬ代り、芸事に、感やの 物がえ

を持って跟いて行くのであった、といって、いつか雪の降る夜、座敷は三人が一組、姉株の芸妓が二人、これに蝶吉が、下方に

本のでおいて、息を切って引返す、両手に下方を持って駈着けるでおいて、息を切って引返す、両手に下方を持って駈着けてちゃんと出して、自分が着換えるとその手で二人分の穿物を揃えて、三味線を――その頃腕達者な烈しい姉は、客の前を揃えて、三味線を――その頃腕達者な烈しい姉は、客の前を揃えて、三味線を――その頃腕達者な烈しい姉は、客の前を揃えて、三味線を――その頃腕達者な烈しい姉は、客の前を揃えて、三味線を――その頃腕達者な烈しい姉は、客の前を揃えて、三味線を――その頃腕達者な烈しい姉は、客の前を指えて、三味線を――その頃腕達者な烈しい姉は、客の前を指えて、三味線を――その頃腕達者な烈しい姉は、客の前を準切ると糸を掛けてる中も間が抜けるといって、伊達に換ります。

もう小鼓を肩に振懸ける力もない。
の皮が破れてる上に冷たくッて手がかじかむ。息が切れて、に手を置く猶予もなく、それ下方といって責められるが、指附ける間も心が急かれ、座敷へ上るとお座附の済む頃で、膝では、二人悠々と入って来る。穿物の雪を落して、片置くや否や、取って返して、自分が持の下方の調の緒を〆めまっ小鼓を肩に振懸ける力もない。

を翳して、を繋いたと見ると、長襦袢のまま片膝を立てた。その上に手を敷いたと見ると、長襦袢のまま片膝を立てた。その上に手。丸を梓に言った時、蝶吉は床から出て、友染の夜具の袖

の襟を正して起きた。の襟を正して起きた。りとその雪のような素顔に乱れたが、往時を追懐する目も据りとその雪のような素顔に乱れたが、往時を追懐する目も据懸けて、小鼓を構える姿で屹と直った。鬢の毛ははらりはら体がどこにあるか分らなかったの。)と、いいつつ片手を肩に(私小さくッてこれんばかりだったんですもの、鼓ばかりで

夜が明けると帳面をさげて、青楼を廻らせられるので、寝るでが明けると帳面をさげて、青楼を廻らせられるので、寝るして、畳の縁に突立ててやろう、転ばない呪禁にと、陰ではの粗忽があった時ばかりではなく、着物を畳んで背筋を曲げの粗忽があった時ばかりではなく、着物を畳んで背筋を曲げたと言っては折檻、踊がまずいといっては打たれて、体に生疵たと言っては折檻、踊がまずいといっては打たれて、体に生疵たと言っては折檻、踊がまずいといっては打たれて、体に生疵たと言っては折檻、踊がまずいといっては打たれて、体に生疵たと言っては折檻、踊がまずいといっては打たれて、体に生疵たと言っては折檻、踊がまずいといっては打たれて、体に生疵がある、ええだらしがない、尻から焼火箸を刺通の絶間もないのに、寒さは骨を通すようなあけ方までも追廻の絶間もないのに、寒さは骨を通すようなあけ方までも追廻の絶間もないのに、寒さは骨を通すようなありたと、陰ではといい、畳の縁に突立ててやろう、転ばない呪禁にと、陰ではといるというながある。

=

間といってもおちおちない。

ほっという間もなかったのである。 昼は昼で、笛やら、太鼓やら、踊の稽古、手習も一日置で、

こ。涙を流しては、といった、蝶吉はその時、崩折れて涙を払っ涙を流しては、といった、蝶吉はその時、崩折れて涙を払っば所も知らず、泣けば舌の尖を捻じられるから、ほろほろ、「うろ覚えに実の母親は知っていたけれども、年紀も分らね

を結えて、私も遊ばして下さいな、といって流に入った。を結えて、私も遊ばして下さいな、といって流に入った。決しさが耐えられないから、前後も弁えず、裾を引上げて、袂なぜだろうと、思わぬ時といってはない。ある時も、田圃の見たり、面白そうに遊んでいるのを見るたびに、同じ人間が見たり、面白そうに遊んでいるのを見るたびに、同じ人間が土手など通ると、余所の児が母親に手を曳かれて行くのを土手など通ると、余所の児が母親に手を曳かれて行くのを

売婦だといって突転がした町の奴等。 かり、情ないものを、辛いものを、慰めてこそくれずとも、の夜中二時頃まで、死んだもののようになってる中に、私ばになって帰ると、何条これを許すべき、突然細紐でぐるぐる巻、になって帰ると、何条これを許すべき、突然細紐でぐるぐる巻、たって帰ると、何条これを許すべき、突然細紐でぐるぐる巻、まきない、売婦め、お玉杓子め、汚らわしい! と二三人、手とやい、ばいた

ると、こはいかに、薄汚い、耳の遠い、目の赤い、襤褸を纏を湛えて、かえって嫣然として天の一方を睨むようになり得て怨まれて、殺されそうになったらば、対手の目球を突潰し目にものを見せてやろう、 簪 の先が尖ってるから、憎まれ目にも見、月も見る癖に、活きた女を慰もうとする畜生等、

が大病である、今生でたった一目、名残が惜みたいという口った婆さんが杖に縋って、よぼよぼと尋ねて来て、タルルの母親

なむとする玉の緒を蝶吉の手に繋ぎ留められて、一たびは目と嬉しさのあまり、呼吸の下で声も出た。母親はその日絶え駈着けて、我にもあらず縋りついた。母 様、峰(幼名)か、婆さんと別仕立の乗合腕車。小石川指しかですが、 の質乏長屋へ夢にも逢いたい母 様と、取詰めて手も足も震う身を、その

気を断って、生命を縮めてもと念じ明した。 精細るばかり塩者を心付けるのも、北里と、小石川の及 腰、瘠細るばかり塩れども、半日もままならぬ抱妓の身。看病人を頼むのも、医大坂家に帰って、後の年期も少いので、上借をして貢いだけの手当も出来ないと見て取って、何は措いて、蝶吉は一先ずの手門廻した様子でも、医師はいうまでもないこと、風 薬を開いたが。

狂犬源兵衛

三 十

ることが出来た。三時間ばかり経つと、病苦も忘れたように吉の手で擦られると、恩愛の情に和げられて、すやすやと寝上へも下へも通らぬので、唇の色も紫になっていたのが、蝶も差込み通し、鳩尾の処へぐッと上げた握 掌ほどのものが、れ、再び母親を小石川の荒屋に見舞うと、三日が間、夜も昼七日目の朝、ようようのことで抱 主から半日の 暇を許さ

みじみ顔を見たのである。なり括。枕に胸を圧えて起上った時、蝶吉は生れて以来、

(よく紀の国屋に肖ていてよ。)

と蝶吉がそう云う顔立、母親は名を絹といった。

う、いずれ母娘が、 住む人入稼業、主に米屋の日傭取を世話する親仁。――間黒源兵衛――渾名を狂犬という、花川戸町 そして神仏の手で、つまり幽冥の間に蝶吉の身を救ってやろ とより天道の大御心には協わぬ生立、自分の体を牲にして、 吉の体は買取られぬ。たとえばそれが出来るにせよ、 が、女腕で一人を過す片遑に端。金を積立てても、なかなか蝶深切も、さすがに娘を落籍してくれるまでには到らなかった ら引取って手許で稼がせる数ではなし。さればといって人の 深みへ落ちようも知れず、もとより抱妓を置く金で仲之町か は、 所得が有って身代が出来た処で、汚れた金で蝶吉を救出して あったけれども、母親はこれを己に鑑み、たといそうしてを出したが、可い抱妓の一人も置いてやろう、と言うものが ちに稼ぎ稼ぎ借金をなし崩し、およそ五年ばかりで身脱をし の因縁づく。罪が滅のためだと思って母親の持った亭主は た、その間に世話をするものがあって、自前になって御神燈 娘を大坂屋に預けて、その身葭、町で弘めをしてから、じみ きっと末がよくあるまい。また二度の勤をしてますます 揃って泥水稼業というは、免れぬ前の の裏長屋に 母はも

ずり歩かねばならないのみならず、煮るも、炊くも、水を汲所、下谷、飛離れて遠くは日本橋あたりまでも、草履穿で駈銭を集めに廻った。橋場今戸の居まわりは云うに及ばず、本渡 者を振廻して処々の米屋に稼がしておく、お絹はその賃

えて、 各々、二階に三人、店に五人、入交りに泊に来る渡者の 銭を集めて、家に帰ると親仁の酒の酌をして、灸の蓋を取換に起きねばならず、夜になるまで、足を曳摺って、日雇の賃むのも、雑巾がけも、かよわい人の一人手業で、朝は暗い内 り落すような難行をしたのは、あえて堕地獄の我身の苦患を扶 るから、 があっても髻を掴んで引摺倒そうという因業な旦那を持って 用を算盤ぱちぱち、五を引いて二が残り、たった三厘の相違 高に割当てて、小遣を遣って、屋根代を入れさせる。この算 かろうというのではない、ただ、単に蝶吉のためにしたのであ に就いても、 身一ツは安々と世間を清く過さるるを、獄に投ぜられて苦役 一息吐くと綿のようになる体で、お絹は添臥をしたのである。 何 の ! 肩腰を擦って、枕に就かせて、それから、歩を取って、 夜の更けるまで帳場に坐って、その疲れ果てて吻と 踊の稽古をしても、三味線の弟子を取っても、我 さばかりにはあらずと思う、ほとんど生身を削 稼ぎ

そちこちする中、

昼も過ぎたので、年寄はまめまめ

くがた

三十二

ったと、

母親がその時の物語。

それを争う力もなくて、指す方もなく便ったのが、この耳 苦辛酸、 い目腐れの婆の家、この年寄の児は、 が利かなくなると、 けれども、 もとより自ら進んでも、 一日の安き暇もないので、 月ばかり前から煩い出し、床に就いて足腰 さまでとはさすがに思い懸けなかった、 夫狂犬源兵衛は屋外にこれを追出し かくはなるべき運命であったろう お絹は身も心も疲れ果て かつて米搗となって源 積年の憂 の 自由

馳走も旨しゅうないと、取って撥退けたので、蝶吉が心得て、な蒲団を被せようとすると、これじゃあ 汚らしくッて折角の夏近いが、寒いからと、年寄は 危んで、背後から昆布のようは不思議のいい目を見せて、たよたよとして火鉢に凭った。(母 さんが烘って上げよう、)と、お絹は一世の思出。知死期ばかりの膳堂をした、お菜がその時目刺に油揚。

と見て、 お絹は手を通しつつ振沢山な裏と表を熟う顔を視めながら、お絹は手を通しつつ振沢山な裏と表を熟(じみなんですから 母 さん似合いますよ、)と嬉しそうにい被ていた羽織を脱いで着せた。

かりを残したのである。あと十日とは措かないで、小石川柳遺言して、日本の男と女の中に、しかも、「麝の中に、蝶吉ばさんといって、立てられた蝶吉の母は年紀わずかに三十三、の色香に江戸の意気張を持って、仲之町でも、葭町でも、小(峰ちゃん、生意気なものを着てるね、)といった。 微郷の京

町から丸山の窪地へ水が出た時、荷車が流れたのが、根太へ打 同じ寺に葬ったのである。 者がないので、蝶吉は母が臨終に世話になったのを恩として、 つかって、 床を壊すと、 件の婆は溺れて死んだ。これも葬る

その墓に取縋ることばかりがこの上もない楽みであった。 時だけは欠かさないで参詣する、梓がなかった以前は、 血が浸んだようなのを怪んで聞くと、今日お墓参りをした時 濡れ手で線香を持ったといって、 晩か手を開いて見せた。指の先が色に染まって、赤くなって 蝶吉はその亡きお絹の引合せだと信じている梓に、 印の墓石はいまだ立てることは出来ないけれども、出来る いつの ただ

梓は思わず、 ですもの、)と縋り着いて泣いた。その手が冷たかったから、 (私母)さんと御膳を食べたのは生れてからたった一度なん しっかと胸に抱いたのである。

(お宗旨は何だ。)

(知りません。)

(だって可笑しいわ。)(問えば可いじゃあな

(一生懸命に南無阿弥陀仏。)(じゃあ何てッて拝むんだな。)

だと思って、 この女が、この体で、この姿で、ただ一人墓の前に泣くの 梓は抱いたまま放さなかった。

どうしてそれが見棄てられるものか、 まだその上に蝶

らは、 して、 そうに、母親に甘えるごとく、肩を振って、 せて、足の拇指の間へ続け様に灸を据えた。妙齢になってかて、口に手拭を捻込んだ上、気つけだと言って、足袋を脱が 畳を掻むしって転げ廻るのを、可煩いと、抱、主が手足を縛っ はあまり苦痛が烈しいので、 大坂屋へ抱え込むと、気が付いたが、急に胸前へ差込が来てて霜を浴びたようになったのを、往来の仕事師が見附けて、 蝶吉は残少になった年期に借り足して、母親を見送ってか 悼むべきものはあるまい。何としてそれが見棄てられよう。 片の同情を求むるのである。天下またかくのごとく、憐むべく のが、張も忘れ、意気地も棄ててかえって我に哀を請い、一の公主にして、復讎の企図を懐いて、薪胆の苦を嘗め尽した その山は崩され、 えば、その家は壊たれ、その樹は伐られ、その海は干され、 そうとしたが、あたかも母の死に逢って志を果さず、まだ一 の肉を啖い、その血を嘗むることをもって、精魂の痛苦を癒い 古は子供の時から、怨と、僻と憤 から、持病になって、三日置ぐらいには苦。悶える、最後に の座敷で酔った帰りに、夜更けて京町の夜露の上に寝倒れた。 から少しは飲けた口のますます酒量を増して、ある時も青楼 たびも男に向って、誑すの嬲るのというはもとより、 一ツ言わずにいた身をもって、これを梓に献じたのである。譬 火ぶくれの痕は、 謂わば復、讎的に己が腕で幾多遊冶郎を活殺して、 世に便なく、心細さの余、ちと棄身になって、日頃 じて、その肉は蒼く、その骨は白く見ゆるまで、 その民は屠られ、その女は姦せられた亡国 今も鮮明に残ってると、蝶吉は口惜し くいしばっても悲鳴が洩れて、 とをもって見た世に対 浴衣に搦んで足 お世辞 冷え

を揃えて、小い爪尖を見せながら、目に涙を浮べたその目で、 した足の拇指を曲げて、件の破目を、待合の、襖の紙が蟹のような形に破れているのを見付けると延っ

(繕ったら可さそうなものね、 何だい、 何だい、)と叱るよう

にいって抉るのを、

ただ一筋に便らるる、梓はどうして棄てられよう。 そんな他愛のない、取留のない、しかも便りのない。狐ばし で、蝶吉は嬉しそうに瞶めていた。それをも梓は忘れはせぬ。 (馬鹿な、) と叱りつける梓の顔、鼻を詰らせながら、涙の目

とかシカゴとかいう処の、博覧会へ日本の女を見せに行く。女を十二人選んで、世話役が三人これを頭取が率いてパリイ ども、髪結が一人、お針が二人、料理人が一人、医師が一人、 る中に、内々勧めるものがあった。これは天下の秘密だけれ 口入宿へ来たのであった。柳橋か、葭、町かと行先を選んでい 蝶吉はかの時無慙なる介抱をした抱主の処置に、平なるこ 圧え切れない虫は突走って、さてこそ天神下の繋ぎ

たので、ようよう、獣、に、楽まれるだけ助かったのである。そ既に観世物になる処、湯屋の前でふっと見た梓に未練が残っ 死んだ処で、誰一人そうかとも言ってくれない体だからと、 日給は一日三円、十月の約束でどうだという。どの道東京で 場所も薔薇の花の盛な中へ取って、朱塗の埒も結ってある、

(こうやって威張って見せてやろうと思ったのよ。) 梓は余りのことに吹出して

の話をする時も、蝶吉は坐ったまま、大手を振って、

(まずね、) と莞爾した暢気さ加減、浅はかさも程があった。 (シャモの牝はこれでございと言やあしないか、)

> 知れぬ、」と梓は息を吐きもあえず、 「僕が附いていない日には、お蝶、お前どんな目に逢おうも

至愛の情の切なるを、ここに打明けて語ったのである。 今まで久しい間、時に触れ、折に当って、動かされた、 すなどという、飛んだことをしてくれた。」と蝶吉の 項 を抱 いて口移しに噛んで含めるように、自分の赤心を語るため、 「それさえ見棄てて、別れなければならないような、児を堕

が心なく、吹散すかと、胸に応える。 ひやりとしたので、手折った女郎花の 儚 る頃いの、果は、悄然と頭を低れて、腕に落した前髪が けたが、梓の手と、声と、語と、真心は、ますます力が籠っ て駈出しもしかねない様子に見え、左に、右に、その面を背 くごとに、ほとんど顔を見らるるに耐えざるごとく、摺抜け たから、身も世もあらず、 蝶吉は聞くこと半ばにして、色を変えて、心、その心を貫 動きもならずいうこと、ここに到 い 露 を、

ような話にしようか、今度こそと、その度に悄れちゃあここ 飲まされるようだった。 々思いの増すようなことばかり。 きっと泣を見なければならないと思うから、今度こそ別れる へ来ると、何かしらお前に言われること、されることが、一 「僕だって最初からこういう間の中といっちゃあ、 私はもう一服ずつ痺。薬を

上は、どうせ破れかぶれだから、 今じゃ家にも居られなくッて、 谷中に引込むようになった 人が何といったって、 世間

も義理も構うことはない、お前とどうぞしてという覚悟を極 めた処へ飛んだことを聞 いてしまった。

りで、 れば、 なし、 られたいと、芸妓のお前にいつも言われた、 い、きりッとして叱ってくれ、癇癪を起して横顔の一ツも撲んまり大人しくッて、頼りがないから、私は何だか物足りな らいに惚れたら可かろう。故郷とは始終便をして、 だから、訳は分ってる、こう見えても可愧しいが、馬車に乗 と世話にもなった。どういう因縁だか、お前にも恩を被た私 とは、兄弟であったり従姉妹であったりした上に、。皆にたん ゃあ居られやしない。こう言えば水臭いと、きっと私を怨む という目鼻だけの、せめて皮でも被ってる中は、二人並んじ 罪とも恥とも知らないでした事にしろ、 たことだよ。僕はお世辞も何にも言わない。女は氏なくして とをするような身分ではないと知りながら、 ちゃになってる女に、姉上々々と書いたから、ああこんなこ な声一つ出してお前にゃあ、用を言い付けたこともない。あ ったこともあるし、御前様々々と、畏られたこともあるが、大きき だろうが、いつも言う通り、 は知るまいがね、 うわべはどうでも、理窟は知ってても、小児の内からの為来しまった。 お前を立派な女だ、姫様だ、 お蝶さん、 可愛い、不便だと思うから、前後も考えなかった。 本当に友達のようにも思い、世話になったとも思う上 様づけにして返事を出した、 取入って色男になろうと思ったのでもない。 ね、およそ堕胎ということをした者は、これがお前は訳が分らないから、何にも世の中のこと お前のような稼業をしている者 女房さんだと心から思ってし 何も機嫌を取 心は腐っても、 男が一人そのく お前の手紙が来 、人のおも 人間 でも

> らぬが、 玉の輿だから、どんな身分の人に姉さんといわれないとも限 そりゃ男の方から心を取って惚れさせようとか、

謂われない仔細があって別れたといって御覧、 なら知らず、ちったあ身分もあるものに本当に惚れられた芸妓 じ訳じゃあないか。これが遊り人とか、町内の若い衆とかいう 可い餌をかって肥えさしてしめて食べようという、に入られようとかして、後じゃあ玩弄にするためだ。 の良人だったと、人にいっても差支えはない。 といっちゃあ、まあ、お前一人だろうよ。 それを思出にして、後生だから断念めておくれ。 そして謂うに 神月は 鴨 と 同 おんな

思っている、」と神月もほろりとした。 私の心も知れるから、体だけ大事にして軽恕をしないで辛抱 ると、成程無理はなかったと、自分のしたことに気が付いて しな。別れるといって見棄てやしない、蔭じゃあどこまでも いまにもう少し年紀でも取って、ちったあ分別がつい 蝶吉は死んだ者のよう . て 来

あならないから、よ、解ったかい。

お前の恥

三十五

である。

のは止せ、よ、気を付けなけりゃ、 て着るのと、いつもいうことだけれど、これから暑くなって、 「悪いことはいわないから、その綿の入らないものを威張っ || 酔醒か。寒くはないか。| としめやかに言ったがふと心付い て、 お前今年は大厄だ。」 それから無理酒を飲む 手を弛めた、

「いいえ、」と内端に小さな声で、ものを考えるがごとく蝶吉

「そうか、また冷えると悪いぜ。」

はいった。

する。梓はこの声を聞くと一入思入って、あわれにいとおし「ええ。」と仇気なく秘さず、打明けて縋り着くような返事を

「なるのが例で。

「体はもうすっかり良いのかい、」

「ええ、」

「ふふ、」と泣出しそうにしながら、蝶吉は無理に片頬で微笑さんと喧嘩はしないか。」れど、その実大の弱虫なんだから心配だよ、この頃は内で姐れが、その実大の弱虫なんだから心配だよ、この頃は内で姐「お前は駄々ッ子で、鼻ッ端が強くって、威勢よく暴れるけ

「やっぱり母 様の夢ばかり見てるのか。」

を拭って、
がいまに、燃立つような緋縮緬を、手に搦んで、引出して、目い裏に、燃立つような緋縮緬を、手に搦んで、引出して、目「ええ、」ともいわず蝶吉は面を背けると、御所車の簾の青

て、梓を見まいとするかのごとく、あらぬ方を瞶めたけれどしいねえ、」といって袖口を除けたが、ぱっちりと目を、錚ら「何にも言わないで下さいな、胸が一杯になって来てよ、可笑

「おやおや、可けないねえ。」

また俯向いて目を塞いで、

「貴方、手を放して下さいな、」

声も消入るようであった。

梓はともかくも蝶吉の心の落着いているのが知れて、い

そのまま背後へ倒れるだろうと思った。ままに手を放したが、ほとんど失心しているような女の体は、

恍惚して梓の顔を見ていたが、細い声で、『蝶吉は、かえって、ちゃんとして、膝に両手を組みながら、

「あなた、」

゙どうしたの、」

「後生だから顔を見ないで下さいな。」

光も暗い、と見ると痩せた薄と、悄れた女郎花と、樗♥とが梓は思わず面を背けた、火鉢の火は消えかかって籠洋燈の

れに描いた秋草の二枚折の屏風が立っているのが、薄暗い灯、水に描いた秋草の二枚折の屏風が立っているのが、薄暗い灯、咲乱れて、黒雲空に、月は傾いて照らさんとも見えず、あわ

で、幻のようで、もの寂しい。

着物の振が両方から、はらりと迫って、身も痩せた。細々きになって屏風に影が映った、その胸をしっかり抱いた。梓は頭から寒くなったが、俯向いて頷くと、蝶吉は向む「私泣くんだから、あっちを向いても可くッて?」

秋草の中へ入って、風もないのに動いたと見ると、一人は畳梓も耐らず、背向になった。二人の茫然した薄い姿は、件のす、姿はしぼんだごとくになり、声を殺してわっと泣いた。とした指の尖が、肩から見えて、潰し島田の乱れかかったのとした指の尖が、肩から見えて、潰し島田の乱れかかったのと、

、一人は壁へ、座敷の影が別れたのである。

半札 の円

天神中坂下の松の鮨の忰源ちゃんである。この男銭を遣わずてる抱妓か、あらず、猫か、あらず。あらず。あらず。湯島内の姐さんか、あらず、傭の婆さんか、あらず、お茶を碾い 燈の下から、まず御馴染の顔。色を御覧に入れますると、和家へ寄ることちょいちょい。さてはや半札の円公は、 れず、 本が刎ねてあいにく繰込のお供も「仕」らず、御酒頂、戴も致さず御定連へ半札を出す例であるから、通称は半札の円公。鈴 た上、 遊派の落語家に円輔とて、都合に依れば座敷で真を切り、「さて早や、」と云う懸声で大和家の格子戸を開けて入る、 を引張ることも出来るし、 長火鉢の前で飼猫の毛を梳 屋町の御神燈の下を潜る事、 合に依れば寄席で真を打つ好男子。 にこの大和家には、蝶吉という、野郎首ッたけの女が居るか に女の子と遊ぶのをもって、 「よう!」と長火鉢の前から奇な声を発して応じたもの 法で芸妓の用達から傭 婆の手助までする上に、隙な時はその取入ること一 通ではなく、余所の障子を張ってやり 蝶吉に肱鉄砲を食ッて、 家へ帰って妹じゃ間に合ずというので、近所だから大 人の一妓を食おうとする、 女中の臀を叩くことも出来るの いている。 毎夜あたかも燕のごとしで、 通と悟ったから耐らない。 **鳶頭に懐中の駒下駄を焼かれ** 獅子身中の虫だとあって、 但しこの男が真の時は必 運が好よ 雞[‡]l*< あ 数 寄 の袖 御神 اُن 殊

> り、 たり、 ている処へ、、件の半札がさて早であった。 てなろか、と引抱て、首環に噛り着いて、 らず、ニャアと一声身顫をして駈出そうとするのを、 り、擦ったり、どうしたなどと、言って見たり、耳を引張っら鉄瓶の湯は煮立つので、色男余の所作なさに、猫を撫でた の姉御に御勘気を蒙ったのを、平蜘蛛で詑を入れて、 姉御は用達にお出懸けなり、火鉢の灰は綺麗だし、 っと心得まするで、何卒相変りませず、今夜も来てい い着いて、「恩愛雪の乳貰」という気取、 あいにく抱妓どもは皆出を勤めて居らず、女中は忙しいし、 髯の数を数えたり、 様々に扱うと、 わざと浮かぬ面をし 畜生とて黙ってお 頬杖して、ふと思 注す後か 逃がし

「師匠上りたまえ。ようこそ、」と諸事内の人で挨拶する。 ぐッと呑込んで、 円輔はあたりを飾し、

一円輔は細長い膝を小紋縮緬の薄ぺらな二枚襲の上から、の莨 入に象牙の筒で、内々そのお人品な処を見せてござる。の莨、今夜は大いに使って、印 半纏に三尺帯、但し繻珍か、宗匠、今夜は大いに使って、印 半纏に三尺帯、但し繻珍た、近眼鏡の輪を真直に切って、指が一本。何と気を変えた んがね、どこへ、姐さんは。」 「また、これだそうさ、」といって窪んだ顔の真中へ指・ 「へへえ、成程、 あいにく出懸けまして御愛想もござい 三尺帯、但し繻珍の何と気を変えた をし ませ -40-

俯向き、

でずらりと膝頭へ擦り落すこと三度にして、

がッくりと

一さてはや。一

円輔はまた耳朶へ掛けて頬辺を扱き上げて、か。」と源次郎は三味線の挂った柱に凭れて澄ましている。「どうしました、大分落胆の気味だね、新情婦も出来ません

「いや、まず、はははは、時に何は、君の落ッこちはどうし

たんでげす、お座敷かね。」

「何ちっと、遠方だそうです。」

尋常に股を窄めて、こってえしょう、よ、色男。」と浮ッ調子で臀をぐいと突くと、こってえしょう、よ、色男。」と浮ッ調子で臀をぐいと突くと、「ははあ、遠出でげすかい、なにかに就けてさぞ気が揉める

も苦労があるんだから、ねえ、おい。」と甘ッたるい。「止せッてえに、これ、詰らないことを、何だ。こう見えて

「よ、苦労!」

と仰々しく手を支いて、ぐッと反って、

「来ましたね、隊長、恐入ったね、どうも。苦労と来たね、

畜生、奢りたまえ、奢りたまえ。」

をする。「いずれ帰ったら奢らせることに致しましょうよ。」と北叟笑

これは!」

屋だ!「甘いものは本人が行けず、いずれそこいらだ、まあ、ぱり、但しぐっと発奮んで伊予紋となろうも知れず、「私」や鮨くごく吝嗇に行った処で、「鰻」か鳥ね、中な処が岡政で小ざっ非その御一統が一杯ありつこうという寸法があるんでさ。ご「いや、師匠、串「戯は止してさ、蝶吉が帰りさえすりゃ、是

ーーセーが、 たまえ。」

「確に、」

「ええ、確りだ。」

「豪い!」と大声を張上げて、ぴたりと、天窓を下げたが、「ポゥ

ちゃんと極って、

「さてどっちです、こうなると待遠しい。」

「八丁堀だそうだ。」

「成程御遠方だ。幾時頃から、」

さっき、使が来て、今夜は遅くとも帰るッていうんだ、ねえ、ササ「一昨日の晩から行きッ切り、おなじく、」と鼻を指して、「ね、

どん。」

\(\frac{\partial}{\partial}\)

勝手から女中の声で、

「はあ、」

「ねえ、おい、富ちゃん。」

う形で、掻っ込んでいた、 哀な雛妓が、て、此方の 灯 を頼りにして、幼子が独り飯食う秋の暮、とい次の部屋の真中で、盆に向って、飯鉢と茶の土瓶を引寄せ

「ええ、」と答えてがッくりと飲む。

「確かい。」

「きっとでございますって。<u>」</u>

「占めた!」という時からからと戸が開いた。

円輔は振返って、

「や、御帰館!」と喚いて、座を開いて、くるりと向く。

源次はぬうと首を伸ばして、

「誰だい、」

「蝶吉姐さんだよ、誰だたあ何のこッた。」

「そう、」といって源次は猫を落して坐り直った。

が瞶めて、ちっと当ての違ったという形で、変に生真面目に、には目も懸けないで、二階へ澄して上ろうとするのを、円輔見えたが、もの淋しそうに入って脇目も触らず、あたりの人の服装で、引詰めた銀杏返、年紀も老けて見え、頬も痩せてを注発している。前えまがによりの帯、唐桟の半纏を着た平生きだが、している。前えまがによりの帯、唐桟の半纏を着た平生まだが、している。前えまが、として帰って来たが、髪も乱れて、顔の色蝶吉は何か悄然として帰って来たが、髪も乱れて、顔の色

「唯今、」と言ったばかり、つんとしてトン、トン、トン。

= +

かした額を撫でた。花札が走ったと見える、御馳走はお流れか、」と円輔はてかてふんだのたと見える、御馳走はお流れか、」と円輔はてかて「御機嫌麗わしからずじゃあないか。顔色が可恐しく悪いぜ、

いんだ、きゃッきゃッて騒があね。」

「どうして、ちっとでも脈がある内に鬱ぐような女じゃあな

あないが、からぶりぶりしてらあな。」御機嫌の悪いのはこの節しょっちゅうさ、心太の拍子木じゃ「いえ、師匠、御馳走はその勝負にゃあ寄らないんだ。但し

うと、源次は黙って、頷く。「やっぱり……。」と押えて、それか、と呑み込んだようにい

声を低うして、

から突出したというのは本当なんで?」「何でげすかい、あの神月とやらいう先生に一件が知れて、先方

返事。 「ああ、」と何だか聴きたくもなさそうに、源次郎は乗らない

「成程竝べて置けば雛一対というのだが、身分には段がある

いと見える、縒が戻りそうでもありませんかい。」 いと見える、縒が戻りそうでもありませんかい。」 いと見える、縒が戻りそうでもありませんかい。」 に華族の婿様だというじゃあありませんか、幾ら若い同志で惚れ合ったって、お前さん、その身分で芸妓に懸り合って屋敷れ合ったって、お前さん、その身分で芸妓に懸り合って屋敷れたのが、して見ると蝶さんが惚れたのも男 振ばかりじゃあなんだね、して見ると蝶さんが惚れたのも男 振ばかりじゃあなんだね、して見ると蝶さんが惚れたのも男 振ばかりじゃあなんだね、 と見える、縒が戻りそうでもありませんか、幾ら若い同志で惚れ。 学士と謂やあお前さん、大したもんでげしょう。その上れ。学士と謂やあお前さん、大したもんでげしょう。その上れ。学士と謂やあお前さん、大したもんでげしょう。その上れ。

こりゃ怨まれそうなこッてげす。何を目当に、御馳走なんぞ、付け込んで、おひゃり上げて、一服承知させた連中、残らず、に聞いてもらいたいなんてッて、あの女が、他愛のない処へに聞いてもらいたいなんで可いものか悪いものか、まず音羽屋でねえれ、芸妓が孕んで可いものか悪いものか、まず音羽屋暮の骨頂だ、ぽてと来るとお座がさめる、 墓 の食傷じゃあ暮の骨頂だ、ぽてと来るとお座がさめる、 墓 の食傷じゃあ 「成程、して見るとこちとら一味徒党。色情事に孕むなあ野 42-

こりゃ奢られッこなし。」
ハ丁堀で花札が走った上に、怨み重なる支が形と来ちゃあ、八丁堀で花札が走った上に、怨み重なる支が形と来ちゃあ、「だってあの御気色を御覧じろ、きっとあれだ、違えねえね、「師匠心配したもうなッてえのに、疑り深いな。」と円輔はまた落胆、源次は落着き澄して、

へん下らない。」

「勿論僕の、その御相伴なんだよ。」

「ずッと有る、有るね、そこあ 憚 りながら源ちゃん方寸にあ 「へ、君だってあんまり、奢られる風じゃありますまいぜ。」

「じゃあ一番お手形を頂きたいね。」と円輔は詰寄った。

りさ。

へへ、詰らねえもんだけれど。」 「手形宜しい。当てが違えば、師匠、どうだ、これを献上は。

て炒りて、 と少し見せたくもあって、件の莨、入を抜く。円輔は打返し

言はなしかね。」 「罷り間違えば、手前にこのお腰のもの、 ちょいと武士に二

顔を上げる。 「いや、江戸ッ児だ。」と誰かの声色で、判然となる。 「豪い?」と大声で、 ぴたりとお辞儀をした、 円輔は驚いて

富ちゃん! 二階から蝶吉の声で、

富ちゃん。」

犬張子

段階子の下で顔を傾けて、可愛らしく 「はァい。」と引張って返事をして、雛妓は膳を摺らして立ち、

何 姐さん。」

お座敷は 皆 断って下さいな、そして姐さんがお帰りだったら 「あのね、私は今夜塩梅が悪いから、どこから懸って来ても

済みませんがお先へ臥りましたッてね。」

「可いかい。」

箪笥の前にぼんやり立っていたのであった。 蝶吉は、帰るとその時まで何をするともなく可厭な心持で、

へ引返すと、一番目の抽斗が半ば開いていた。蝶吉は衝と立雛妓に言付けて、座敷を、斜に切って、上、口から箪笥の前

「おやおや、私が開けたのか知ら、」

って、

掛けておくのである。 と思い寄らず弦いた。 抽斗には、神月の写真をいつも立て

れと、偲ぶ思の増すのが辛さに、俤を見まいとするのでなとさえ、我身で儘ならぬようで儚いので、あえて、今は仇なと 月は知らないことでも、蝶吉は何となく、その写真を見るこ の姿でも、見てはならないようにされたごとく感じている。 い、身に過失があって、縁切ったと言われた人の、たといそ ふッつり切られてしまってからは、人は見なくッても、 抽斗の縁に手を掛けて、猶予いながら、伸上るようにして恐った。

ず、 背中でとんと閉ッた途端に、魂を抜去られたか、我にもあら の裾が洩れて、灯に風も当たらず寂莫としてもの寂しく華美向の隅に、雛の屏風の、小さな二枚折の蔭から、友染の掻巻きょう しいものを食べたっけと、耐らなくなって、此方を向くと、 ように抽斗を差し懸けて、ああこの写真から下げて来ちゃ旨 しばらくして、蘇生ったもののように、顔を上げる。 両手で顔を隠して、俯向いて、そのまま泣いていた。

いもののように差覗こうとして目を塞いだ。がッくり支える

な死体がいているのは、蝶吉が冊く人形である。掻巻はいつな死体がいているのは、蝶吉が冊く人形である。掻巻はいつな死体がいているのは、蝶吉が冊く人形である。掻巻はいつな死体がいているのは、蝶吉が冊く人形である。掻巻はいつな死体がいているのは、蝶吉が冊く人形である。掻巻はいつながて追い着いて重を引くまで、記をする気でこうしている。おいて追い着いて手を引くまで、記をする気でこうしている。かがて追い着いて手を引くまで、記をする気でこうしている。かがて追い着いて手を引くまで、記をする気でこうしている。かがて追い着いて手を引くまで、記をする気でこうしている。かがて追い着いて手を引くまで、記をすると着物を着更れたかも活きたるものを愛するごとく、起きると着物を着更あたかも活きたるものを愛するごとく、起きると着物を着更あたかも活きたるものを愛するごとく、起きると着物を着更あたかも活きたるものをでするごとく、起きると着物を着更なさせる。抱いて風、車を見せるやら、懐中へ入れて小さな乳を押付けるやら、枕を並べて寝てみるやら、余所目にはまるで狂気が。

四

を包んだが、玉のような腕を人形の掻巻の上へ投げ掛けて、蝶吉は枕を並べて、着たまま横になって裾を伸ばして、爪先寝ようや、」のような筋重い、胸が痛い、体中がふらふらする、もう「ああ、天窓が重い、胸が痛い、体中がふらふらする、もう

よ、すっかりお花を引いて負けて来たわ。二晩ちっとも寝な「坊や、ちょいと、どうしたの、お骨ちゃんは可けなくッて

た。

ぴったり寄って頬を差寄せ、

なんじゃない、世間の義理だからって言うんだけれども、何 されると、死んでからも添われないと悪いから。何も私を厭たようで、どんなに心配を懸けるか知れないし、愛想を尽か 私 は知りません。天窓へぴんと来るような五円花でも引かな まってさ、そして軽忽なことをするなッて言ってくれたって うなるか知れないッて、始終いっていたのにさ、打遣ってし よ。だから、最初ッから、お前さんに棄てられると、私はど ちゃんに叱られてから、お花なんざ引くまいと思って、水も沸 と、そこらへ酢を打つのよ。私はもう死ぬようだ。お前のお父 でお前、六人一座でさ、 灯 は点け通しだし、息が苦しくなる だか自分勝手のようだわねえ。 くッちゃあ、自分で生きてるのか何だか分らないもの。 お暇が出たんですもの、体を大事にしたって詰らなくなって したんでなくッちゃ飲まないでいたけれども、 いんだもの、天窓が割れるようなの、悪いわねえ、 だけどもねえ、身でも投げて死んじまうと、さも面当にし お母ちゃんは 穴蔵ン中

と摺着いたが、がッくり仰向き、薄い燈火に手を翳して見ら、坊や、お前も配いことをされて、鬼とも蛇とも思ってよら、堪忍することはするッて、お父ちゃんもそうお言いだから、お前も口を利くだろう。少しも分らないでした事だから、お前も口を利くだろう。少しも分らないでした事だから、お前でも生きてるなら可いけれど、目ばッかりぱちぱちや、お前でも生きてるなら可いけれど、目ばッかりぱちぱちどうせ早く死にたいんだから、何だって、構やしない。坊

ないから、黒くなったよ、段々痩せて消えれば可いな。」 「おやおや、痩せたわねえ。徹夜をして、湯にも何にも入ら

るばかり、金金具で留めた天鵝絨の腕、守、内証で神月の頭字いた着物は飜って、二の腕もあらわになった。柔肌に食い入と袖口を掴んで肩の辺まで、撫で下げると、上へ伸ばして

を上げると突然忘れたように食い付いた。腕守を噛んで、頭蝶古は清しい目をぱっちりと睜って、恍惚となったが、枕

神というのが彫ってある。

を振って、髪を揺ぶり、

のは厭。」と、泣吃逆をして、身を顫わし、「厭よ、、私厭よ、別れるのは厭、厭! 「厭よ、私厭よ、 厭だ、厭だ、別れる

ええ、 「写真くらい見たって、可いじゃないかね、可けないかい、 構うもんか。私はもう、」

むッくり起上ろうとすると、茫然犬張子が目に着い た。

して、 「はッ、」という溜息で、またばったり枕に就いたが、舌打を

「寝ッちまえ!」

と縋り寄り、

「私も端の方へ入ってよ、坊や、さあ、お乳。」

である。 持ち添えて、 といって、 見得もなく、 と見ると、 人形の顔はふッと消えて無かったの 懐を掻開けて、ふッくり白いのを

胸騷

四十

がけに人形の顔を掻巻の襟で隠しておいたのに気が付いた。「おや、おかしいねえ、」と吃驚して屹となったが、蝶吉は出 「まあ、さっきから顔が見えたようだっけ、それじゃあ、 俤

だったかしら。」 思わず悚然として、あたりを見たが、莞爾して、

といって掻巻の上を軽く叩くと、ふわりと手が沈んででがな 「ちょいと、肖ていると思うもんだから、お前は生意気だね。」

巻を上げて見ると、牡丹のように裏が返った、敷蒲団との間 「あれ、」とばかりで、考えたが、そッと襟を取って、恐々掻 -45-

には、紙一枚も無いのである。 蝶吉は我知らず、

「富ちゃん、」と声を立てて、真直に跳起きた。

から目を放して、座の一方を見たのは、谷中瑞林寺の一間に 「はてな、」机に凭りかかった胸を正しく、読んでた雨月物語

する、学士神月梓である。

なにがし殿の庭にあった梅の古木で刻んだという、渠が愛玩だが、借ものの経机を傍に引着けてある上から、そのむかし の香合を取って、一捻して、 衣帯正しく端然として膝に手を支いて熟ともの思いに沈ん

「こんなこッちゃあ可かん。」と自から 窘 めるがごとく 呟 いっぷき

洋燈を見て、再び机に向った時、室が広いので灯も届か 薄暗い古襖の外に咳く声して、

「先生、御勉強じゃな、」といいながら静かに入ったのは、院

の住職律師雲岳である。

学士の前に一揖して、

聞いている者までが、引入れられますような、心細い情ない 貴方の御声というものは、実に白、蓮の花に露が転ぶというの途はた で文章はよく聞取りませぬが、不思議に先生、今夜の といったように、自然とうら悲しくなりましたが、一体お読 えようのない、清い、澄んだ、冴々した、そういたして何か 御音読中でござったで、 か、こうその渓川の水へ月が、 御覧なさるか、 御音読中でござったで、暫時あれへ控えておりました。何を「お邪魔を。実はまた一石願おうかと思って、参ったがな、 結構なことじゃ。襖越ではござるし、 映ると申そうか、いかにも譬

梓はト胸を突いた様子で、

みなされたのは。」と思入った風情である。

処が。」といいかけて、梓はうら寒げに、冷たい養婦の上から胸 ほど、時々ぞッぞッとしちゃあその度に美しい冷い水を一雫の存じの雨月なんですが、私もなぜか自分の声に聞き惚れる を圧えた、人にも逢わず引籠って、二月余、色はますます白 て、それが解けて行くようで、月の雫で洗ったようです。そ 悪さといったらなかったんですが、まあ、体が半分水になっ れでいて。爽かな可い心持かと思うと、そうじゃない、ここン ものを言うにさえ、唾がねばって、舌がぬめぬめして心地の ずつ飲むようで、唾が涼しいんです。近頃はどういうものか、 「希代なことがあるんですよ、お上、人、読んでいましたのは

を見た。

や延びたが、艶を増して、品好く痩ぎすな俤は、見るともの凄な、目はますます涼しく、唇の色はいやが上に赤く、髪はや いほどである。

|胸||騒ッていうんでしょう。|

「なかなか、幽冥に通じて、餓鬼畜生まで耳を傾けて微妙のるように、仰有れば成程良い声というんでしょうか。」 含んで、神月は可愧しげに上人が白き鬚ある棗のごとき面。 でしょう、いずれその事に就いてでしょうよ、」と微かに笑を な、そして、やはりお心持は。」 音楽を聞くという音調だ、妙なことがあるものでございます としていれば倒れそうになるんですもの、それを紛らそうと ので圧えつけると動気が跳る様で切なくッて可けません。熟「痛いのかと思うとそうでもなしに、むず痒い、頼ない、も いつになく、声を出して読み出したんですが、自分で凄くな 「憑物でも放れて行ったように思うんですが、こりゃ何なん

め断っておかねばならぬ。

な人の中に生れもし育ちもし、且つ教えられもしたことを 予

ここに梓が待人、辻占、畳算、夢の占などいう:「どうしても思い切れなかったんです、実は……。」

夢の占などいう迷信の盛

ここに梓が待人、

身を苦界から救うのはあえて困難な事ではなかった。婿君であったから、一擲千金はその難しとせざる処、蝶吉が

吃驚したようにあたりを見ながら、夢に、菖蒲の花を三本、莟ばのいいので あるが、一朝、蝶吉はふッと目を覚して、現の梓を揺起して、 ともぱっと咲いた、なぜでしょう、といって、仇気なく聞か が射した。黄金のようなその光線を浴びると、見る見る三輪 なるを手に提げて、暗い処に立ってると、朝くなって、太陽 にも梓の肌を汚さしめず、幾分の間隙を枕の間に置いたので 心を知った。 て、我が心かえって汚れたりと、学士はしみじみ蝶吉の清 を赤うするまで心に恥じた、あわれ泥中のこの白き 蓮 に比し 冷汗もまだ止らなかったくらいの処へ、この夢を話されて、 れた。梓はあたかも悪夢に襲われて、幻の苦患を嘗めていた、 ながら、火中一条の冷竜あって身を守り、婀娜窈窕たる佳人ながら、火中一条の冷竜あって身を守り、婀娜窈窕たる佳人 に、蝶吉と 衾 を同じゅうする時は、さばかり愛憐の情は燃え 擦傷の痕もない、玉のごとき身を投じて、これが歌枕の一室 ど、 掌 にも、額にも、悪汗一ツ掻いたことのない、 ポペ゚゚゚゚゚ さすがに清い、美しい体のものだとは思わない。そのほとん 街にあるものの、かえって、実があって、深切で、 もっとも他と違い、神月は、 、殊に一種任 侠の気を帯びていることを知ってはいたが、 己が既往の経歴に徴して、花 情を解し 黒^{ほく}ろも

を蹴つけたばかりでは合点せず、その日の主人役が客に済ずた髯を逆にして張飛のように腹を立て、ひいひい泣入る横腹探ろうとしたので、癇、癪を起してその横、顔を平手で撲ると、探明がれたが、言うことが、癪に障った上に、酔って懐の玉をその時と、いま一度は、蝶吉がしかるべき軍人の一座の客

は、耐らずその場から車に乗せて、これをわが園へ移し植えおさえ手もなかったといって、梓に顫着いて口惜がった時にた朋輩も、女中も、駈上った若い者も、顫えるばかりで、取を取って、小刀で前髪を切って、座敷をつッ立った。居合しとあって、死だもののようになってるのを引起し、二人両手

ようと思ったのである。

天的一種の迷信を持ってるというはここのこと。そろ籍そうと思わぬことはなかったが、渠が感情の上に、先なられれば可いというのだけれども、いうがごとく、聞くがごないで、一生芸妓をしているから、変らず見棄てないでさえもとよりその時には限らない、女は迷惑を懸けようとはしもとよりその時には限らない、女は迷惑を懸けようとはし

を祝してビールの満を引くもの数をしらず。梓は丸腰の着流を祝してビールの満を引くもの数をしらず。梓は丸腰の着流はにして哄と矢叫の声を立てて、突然梓の黒斜子に五ツ紋のがあった。一座の中に蝶吉が居た。また一座の中に、下宿の羽織を奪って、これを蝶吉の肩に被せた。嬉しい!と手をあって、疾より秘計を贈らし、兵を伏せて置いたれば、酒半と着流して坐りながら、下谷の地を操縦する、神機軍師朱武にして哄と矢叫の声を立てて、突然梓の黒斜子に五ツ紋の羽織を奪って、これを蝶吉の肩に被せた。嬉しい!と手を羽織を奪って、これを蝶吉の肩に被せた。嬉しい!と手を羽織を奪って、これを蝶吉の肩に被せた。嬉しい!と手を羽織を奪って、これを蝶吉の肩に被せた。嬉しい!と手を羽織を奪って、これを蝶吉の肩に被せた。嬉しい!と手を羽織を奪って、これを蝶吉の肩に被せた。嬉しい!と手を羽織を奪って、これを蝶吉の肩に被せた。嬉しい!と手を羽織を奪って、これを蝶吉の肩に被せた。嬉しい!と手を羽織を奪って、これを蝶吉の肩に被せた。嬉しい!と手を羽織を奪って、これを蝶吉の肩に被せた。嬉しい!というはいきには、一体の楽を引きず、谷の横の木を乗り、というには、大学出の人の新年会の横を視してビールの満を引きると、色男梓君のために、健康の着流をがあった。

を包んで落ちた。留めながら件の羽織を脱いで、はらりと投げたのが、中に鶯盆栽の枝に留ったのを、逃がすなと箒を突出すから、梓は引から飛んで、到来ものを飾った雪の積ったような満開の梅の立ち込んだか、「鶯」がお居間の中に、あれあれという。鴨居

り。 起して、黄鳥を手柄そうに見せると、冷やかに一目見たばか起して、黄鳥を手柄そうに見せると、冷やかに一目見たばか伝って夫人竜子の寝室に入って、寝台の枕頭に押着けて、呼伝って夫人竜子の寝室に入って、高台

が、争うこともせず。若として目を瞑った。その時も梓は顔の色を変えたのである(私はまだ起きる時間ではございません。)と背後も向かず自

空を眺めている内、いかなる名鳥か嚶々として、三度、梓の持って来る間を、手では、と懐に入れながら、見霽の湯島の(失礼、)といってずッと出て、廊下に立ちながら籠を命じ、

胸に鳴いたのである。

ある。 めに、常に躊躇していたのであったが。 彼を救うてこれを掌中の玉とせんか、 らの感情で、羽織の同一のが兆をなして、恐らく、 うと思うたびに、さることはあらじと知りながら、幼い時か ざわざ葬らせに使を出した。 で、 長くあるまい、と思う念に制せられて、その ていたのである。 ゝたのである。蒔絵の鳥籠に、件の盆栽の梅を添えて、わ早や馴れたかと思うと、あわれ、翼をちぢめて目を落し 日もあらず煩いでもするのであろう、 籠が来て懐から出そうとすると、羽ばたきもしない 以来心に懸って、蝶吉を落籍そ 時を措かず砕けるの むしろ、生命が 寿 を欲するた 我が手に

四 十 四

「……」」」には、表示して、というにです。

は玉司に昔から勤めている取しまりで、何十年にも奥からは先刻私を尋ねて来た、品の可い老女があったでしょう。彼

子の乳母なんですが、実はその用で参ったんで、 出た事がない、まだ鉄道はどんなものだか知らない女で、竜

姫様だ。貴方が内を出てからは、鬱々として人にもお逢いなりはしないけれども、何をいったって、初めて男を知ったお こっていいます。それとはあんな御気性だから、怪我にも仰有の乳母なんですが、実はその用で参ったんで、私にまた帰

さらない。

を通った腰元が跫音を立て、それがために目が覚めたといっ悩みが一通じゃない。この間もうとうとしかけた処へ、縁側 日も四日も、七日ばかり一目もお寝みなさらない事がある。医者は神経衰弱だというそうですが、不眠性に罹って、三 こうとしました。 て腹を立って、 小刀を投付けて、もうちっとで腰元の胸を突

見かけはどんなでもよくよく心を知ってるのは、 この頃じゃ、 まるで一室の外へも出て来ないような始末。 乳母だから、

はうら寂しい。

そういうことでございました。 私に帰れ。 承れば大分御謹慎で、すっかりお品行も治ったそうだって、

りますまい。 随分片意地な老女が、我を折っていましたから嘘じゃああ

のが解りましたが、こうなった上のこと。 成程それでは あんな夫人でも私をそれまでに思ってくれる

私の引籠って身を責めているのは、ただ先祖に対して済まな りたいためではないから、断然、これッきりだと思ってく いと思うからだ。 謹慎をしているのは、 あえて辛抱を見せて、 玉司 の家に帰

ときっぱりいって帰しましたよ。」

「ふう、」と上人は頷いて、じっと考え、

結構じゃ。」といいかけて、梓のもの寂しげなる顔を見て、 「それでさっぱりとなされたかな。 「いや、段々お心が静まって来て、好い御返事をなされた、

「ええ、さっぱりしたそのせいだろうと思うんです。

断然、 内々思ってました内は、何かしら心の底に温があったのを、 金の蔓があって、一式のことに落籍して素人にしてやろうと、 使を帰した上、夫人の心も知れて見れば、いかに棄身 まだ、

に独り残されたようで心細い、胸騒のするのはそのために違 お蝶の方も、もうあれッきり、ふッつり切れた、私はこう孤 島 いないんです、お可愧いね、」といった清らかなる学士の笑顔 になった処で、 無心などいえたものじゃあない。そうすりゃ

ぞ先生に茶を上げい。」 たらしいことをいって、呵々と笑って、行きがけに大音で、「 ろう。たんと迷わっしゃるも面白い。」とこの人こそ悟り切っ ははあ、 いや、お若い中また余り悟り澄さな い の も 宜ぷ 誰

れず、 れなくなって、香の薫に染みた不断着をそのまま、かかる時 梓が行くのは必ず湯島。 梓はまた机に向ったが、 胸騒がする、 気が鬱ぐ、もう引入れられそうで耐えら 木の角では、心の跳るのが押え切

白木の箱

四十五

は蝶吉である。 あたふた狼狽えたようなものの気勢、癇癪交りに呼んだの「富ちゃん、ちょいと、富ちゃん、私の人形を知らなくッて、」

次は、傍、に目配せした。「一件だ、」と、これを聞いてかねて心得たもののごとく、源

だが、円輔は、えへん! 声 繕をして二階に向い、 「来ましたね。」と低声でいって、訳もなく天窓を叩いて竦ん

た、豪いこッたよ。」 じゃあない、大変なことがありますぜ、ちょいと大したこッ 「お蝶さん、何ですか、人形。人形どころかい、そこどころ

「何、」と切って棄てたような、つッけんどんなもの言いであ

ら下まで来いだよ。」 「まあさ、ちょいとおいでなさいていこッた、こッたの性な

「富ちゃん、 富ちゃんてば。」

蝶吉は取合ずに、雛妓ばかり呼立てる。

変なこった、 「まあおいでなさいっていうのに、何ですぜ、 お蝶さん、神月の旦那から、」 ちょいと、大

「ええ、」

円輔は大乗地で、「それ見ねえ、」と源次がちょいと突いて、にやりと笑うと、

「旦那から、もし小包郵便が来たんですぜ。」

ら、和、のある、音色を下で聞澄して、ややらぎ、ねいるとないではいるではまずまでいませんよ。」と邪険には言ったけれども、そのうち、自いがないませんよ。」と邪険には言ったけれども、そのうち、ものずか 「神月さんからお届けものだ。」と源次も傍から口を添える。

「御存じの筈ですが、神月さんといやあお前さん、」

「可いよ。」

て黙りとなった。 「宜しくばお止めになさいまし。」と大いに澄し、顔を見合せ

「富ちゃん、」

て立っている雛妓を見て屹と目で知らせた。 「そら、また富ちゃんだ。」といって円輔は、 敷居の処まで来

「私は知らないの。」

しばらくして、声も優しく、

「いいえ、小包さあ、」

ったが、階子段がトンと鳴った。「嘘ばッかり、」といいながら、 「本当だってば、何を疑るんだな。」と源次は大真面目でいる。 ちょいとためらった様子であ

下から仰山に遮って、

「ちょいとお待ちなさい、お蝶さん、 請取がいりますぜ、

「宜しい、」と男らしく派手に、爽にいった。これを機掛に、らっしゃるなら、どうぞ、御懐中物を御持参で、」 蝶吉は人形と添寝をして少し取乱したまま、 しどけなく、

調子に三階から下りて来て、

「どこにさ、」と嬰児の強請るようにいいながら、人前を澄し

「気が疾いな、どうも、師匠出してやりたまえ。」

まずお受取を頂戴いたしたいような訳で。」

な羽織を飜りと撥ねて、 「豪い!」といいさま、 「すッかり負けて来たんですからたんとはなくッてよ。」 小紋縮緬で裏が緞子、 同く薄ッぺら

抜いて、とんと置くと、ずっと寄って、紙幣を請取り、 お納戸地の帯にぐいとさした扇子を

「何にいたしましょうな。」

「 まあ、 師匠。」

源次は取片附けて、

じゃあちょいと升どん。」

_ごちそうさま、勝手から、

「御馳走様ですね。」

を突出し、源次は柱に天窓を着けて片陰で仰向いた、 「さてはや、何でげすえ御到来物は。」と円輔は洋燈の方へ顔 胴中を入違いに、長火鉢の前で形が X 。 この両

うこゝら、月麻盆天窓、これが秘薬の服方、煎法、堕胎した遣手が老いたりという面 構、目肉が落ちたのに美しく歯を染ーと・すすれて、背に 「どうもお相伴を難有うございますよ。」と向へ坐ったの

後始末、体の養生まで一切取計った、口の臭い、お倉という婆娑

である。

慎みながら、若いから、今も今で、かねていいつけられて 窘な んだ、花札を引いて、気の衰えるまで負けて帰ったので、済 蝶吉は、 確。に小包を請取ったので、かくとは思い懸けず、

> いと、傍目も触らず、血の上った耳朶を赧うして、可愛らしる極の悪さ。震える手で明い処へ持出して、顔を見られま く、畏って、右見左見、 まなさも済まないし、嬉しさも嬉しければ、包んでも色に出

「おやおや、大倭家内松山峰子様行と書いてあるねえ。」

「峰子様、よッ。」と懸声をするは円輔なり。

「神月より、……おや、平時の字と違ってやしなくッて?… 「可くッてよ、」と可愧しそうに、打返してまた裏を見た。

…何だか手が違ってるようだねえ。」

確めてもらいたいので、わざと不審げに呟いた。 あえて疑うというではないが、まさかと思う心から人にも、

前さん。」と婆々は極めて鹿爪らしい。 「わざッと手を替えてお書きなさいましたあね、そりゃ、 お

「そうねえ、何だか包が大きいわねえ、何だしら。 玉手箱という形で両手に据えながら目を瞑る。

「何でげしょう。」

「そうさね。」 何だか、」

一番あてッこで、 丁と出たらまた頂戴は、どうでげすえ。」

「下司張るな下司張るな。」源次は鷹揚に、

「どうせ詰らないものよ。」と蝶吉は笑いたそうにし て押耐え

円輔は例に因って、

よッ!

「沢山おひゃらかして下さいな。」と怒ったのでも何でもない、

いそいそ膝の上へ抱下して斜にした。

と 簪 を抜いて、そっと持って、

めて、簪の尖で、封じ目を切って解く。 「邪険に封をしてさ。」といいいい、名工が苦心の眼で、瞶

上に広がった。中は、中は、手文庫ばかりの白木の箱。 「さあさあ御覧じろ、封が解るに従うて、 上包はくるくると開いて、 やまと新聞の一の面が颯と膝の お蝶さんの、 あの

顔が段々弛んで来る処を、」

「私 沢山だ。」 「どういう訳だか、不思議なもんさね、」と源次郎は憎体な。

んか、頬を膨らしてさ。」 「何もお前さんそんなにつんとすることはないじゃありませ

「一生懸命でおいで遊ばす、 さあ、耐らない。ほれ、」

「それ笑った。」

蝶吉は莞爾して、

て、裳を蹴返すと二階へ、ふい。 「御免なさい、」というかと思うと、 引攫うように小包を取っ

驚いたのは円輔である。ぐんにゃりとなって、

四十七

て。 自暴よ、お花札なんか引いてさ、堪忍して下さいな、可くッやは、お花札なんか引いてさ、堪忍して下さいな、私は見向いても下さらないんだと思って、 がないんだもの。これからきっと大人しくしますから。いい おまえ様の深切を無にしたようだけれど、だってしよう 私は見向いても下さらないんだと思って、

> のように思われて、蝶吉は二階に上ると、 しめて身を顫わした。この音信があったので、許されたもの わねえ。それでも開けても可くッて。嬉しいなあ、」と胸を抱っけた通にしていると思っていらっしゃるんだよ。悪かった まずその神月の写

真を懐に抱いたのであった。

を開けた。 の躍るのを忘れるばかり、写真で圧えて、一生懸命になって蓋をれでも箱の中が気に懸って、そわそわして手も震い、動悸

箱の中には紙にも包まず裸の人形が入っている。 ふっと見て少し色を変えて

あない、」とこの時気が付いたのは、自分の人形のことである。 ら、私をこんなにしておいて、まだそんなことをする方じゃ 「おやおや、おかしいねえ、あてッこすりに寄越したのかし

浮足で、密と寄って、蒲団を上げて見ると何にもない。思切 直って、引寄せて、 て、門げてあった。蝶吉は、呼吸を詰めて、唾を呑み、座に 着せておく、筒袖の着物に襦袢、 って、白い手を冷い小さな閨の中に差入れると、丹精をして と、悚として、ばたりと箱を落して立ち、何を憚るともなく、 包が神月からというのに顛倒して忘れていた、先刻を思出す として、片附いた美しい二階の座敷を『飾したが、そうだ、小 して、震い着いて、 蝶吉は夢のような心持がして、気味悪そうに、灯の暗い、森 熟と見て蒼くなった。 縮緬の書生帯まで引くるめ 涙をはらはらと落

の丸いものばかり蝶吉の手に残ったので、 の乳のあたりを手に取ると、首が抜けて、手足がばらばら。胴中 「坊や、」とばかり、あわれな裸身を抱え上げようとして、そ

「厭!」と声を上げざまに、蛇を掴んだと思って、どんと投

げると、空を切って、姿見に映って落ちた。

下階では哄と笑う声、円輔は屹と見得をして、

「今のは確に、」

「雲井の印紙を引剥がして、張り付けて、筆で「叱!」と押えて源次はしてやったという顔色。

筆で消印を押した

お手際なんざあ、」

゙どんなもんだい。」

「口惜しい!」と泣く声が細く耳を貫いて響いたが。「いや、御馳走様でございますよ。」

下じめの端を両手できりきりと〆めながら、蹌踉いて二階

を下りて来た、蝶吉の血相は変っている。

んで、驚いて見る下地ッ子の小さな手を砕けよと掴んでぐッ 顔も蒼白く、目が逆釣り、口許も上に反ったように歯を噛

と引着けた。

「さあ、言っとくれ、言っとくれ、承知しなくッてよ、私の、 「あれ、姐さん。」

て不可いの、あんなにお前さんにも頼んでおくものを、……」 私の人形をあんなにしたなあ誰だ。いいえ、知らないッたっ には筋が通った。 と力を籠めておさえるようにいったが、ぶるぶる震える、額

だか、いっておしまい、いえ、聞かしておくれ。蔭になり日向「手も足もばらばらよ、酷いッたら、酷いことよ。さあ、誰 しょっちゅう旅ってやる姐さんだ、お聞かせなね、

ええ!

畜生言わないかい。」

「痛い、痛い、姐さん。」とべそを掻いてたのがわっと泣出し

灰神楽

居合腰に伸上って、挟むを取って分けようとするのを、身悶し「ま、ま、お前さん何でございます、手荒なことを。」と婆は

振向いて屹と見て

くれだから、深切な人だと思ったわ、 をいって誑してさ、お肚が痛むか擦ろうなんぞッて言ってお 「お婆さん、お前にも私は怨があってよ、可い加減なこと 悔しいじゃあないかね。

武者振附そうだから、飽気に取られていた円輔が割って入っいたができます。 畜生、放せ、 何をするのよう。」

「さてはや、」

いてるよ、野幇間め、」と平手で横顔をぴたりと当てる。 「ええ、手前達の手を触る体じゃあないんだい、御亭主が着

「豪い、」と吃驚。 天窓を抱えて、

やって、嬲って奢らせた上、笑い着けて、下駄の肚癒をして、のさかさまめ、」まさかにこうとは思い懸けず、いやがらせを それから、仲直りをして、ちょいと悪党な処を見せて、そこ 「亭主持が凄じいや、 向 から切られた癖に、何だ、 取揚婆

らで思い着かれようという際限のない大慾張、源次は源次だ けの考で、既に今夜印半纏で、いなって反身の始末であっ の血相の容易でなく、尋常では納りそうもない光景を見て、 人形の手足を掙いでおいたのに「極」って、蝶吉

「は、私お前さんの抱妓じゃありません、誰が、そんな水臭

「お蝶私は主人だよ。」

「まあ、姐さん、」とばかりで円輔は遣瀬がない。

て差し、生白い足を大跨にふいと立って出ようとする。 「ざまあ見やがれ、」とふてを吐いて、忘れずに莨入を取っ

居合すは恐と、立際の悪体口、たちぎやしていくち

「待ちゃあがれ。」

「ええ、」

悪戯をしたなあ、源の野郎、手前だな。」

鉢の向側、これがその座に敷いてある、黒天鵝絨の大座蒲団のする我家の帳場を、一渡 眴しながら、悠々として、長火 ずくめのいなせな形で、暴風雨に屋根を取られたような人立屋の姐さんで、蔦吉という中年増。腕も器量も凄いのが、唐桟 にきちんと坐って、「寒い。」と肩を一つ揺っておいて、 「いいえ、私だ。」とすっきりいって、ずッと入ったのは大和

「何ですッて、」と蝶吉は目を据えて立ったまま、 「皆静にしておくれ、お蝶さんお前もおすわり。」 主婦が方に

お前さん、」と屹という。

向直って、

あい、私さ、」

「突立って、何だ。」「何、」

「おやおや、この女は、目が上ってるよ、水でもぶッかけて 「坐ったらどうおしだい。」

> いて、まだ足りなくッて。畜生!(義理知らず、お前さんの出ようく知ってて私に教えてさ、無理にあんなことをさせてお 蝶吉は急き上げて言うこともしどろである。 は田舎じゃあないか、私はね、仲之町で育ったんです。」と 入らないで、人形を壊したのよ、よ。お前さんは悪いことを、 せんか、命もいらない人よ。あんまり思。遣がない、何が気に さ、薬を飲ませてさ、そのせいで、私逢えないんじゃありま い、分らない奴に抱えられるもんか。人が知らないと思って 四十九

た長煙管で蝶吉の肩をぴしと打った。「黙れ、黙れ、黙れ、ええ黙らないかい。」といいさま持って

「畜生!」

様も可い加減にしておくが可いや、狂気。 朝 から晩まで人形 も障ります、こっちゃ何も、慰、に置くお前じゃあない、お姫 なって死なないようにとお慈悲で堕してやったんだ。商売に んて不景気な、そんな体は難産と極ってるから、 さ。しッ越もない癖に、情人なんぞ拵えて、何だい、孕むな 町でお育ち遊ばしたあなただから、分外なお金子を貸した訳 何だい、憚ンながら大金が懸ってますよ。そうさ、また仲之 いじくりをし通されて耐るもんか、外の妓にも障るんです、 「生意気な、文句をいうなら借金を突いて懸るこッた、分が 血だらけに

あ言わしてやろうか、」が上って、何だと、畜生。もう一度いって見ろ、言わなきゃったあ売れるからと大目に見て、我ままをさしておきゃあ附れちゃあ邪魔にもなるね。面も生ッ白いし、芸も出来て、ち五人六人と雑魚寝をする二階にあんなもの出放しにしておか

である。と乗上って火鉢越に、またその頸のあたりを強く打ったの

に揉む。「まあさ、まあさ、姉さん。」と円輔は手持不沙汰なのを頻りである、まあさ、姉さん。」と円輔は手持不沙汰なのを頻りでありた。

「一体口が過ぎるんですよ。」と婆はねッつり。

呼べるなら呼んで見るが可いや。」ら突出された癖に何だい、器量の悪さッたらありやしない、気になってつけ上りまさあね。神月さんがどうした、向うか「いいえ、たまにゃこんな目に逢わせておかないとね、いい

を、婆がむずと掴まえた。「ええ、呼べなくッて、」と泣々いいながら、立とうとするの

「お前さんは。」

蝶吉は弱々となって崩折れて、

がら、投遣りに突かかる。なって、顔も体も水から上ったようにびッしょり汗になりないなね、さあ、さあ、」と小供が捏々をいうごとく、横、坐にするのよ。どうせ死ぬんだから、さあ、殺しておしまいなさ「悔しい、悔しい、悔しい、悔じい、皆で私を、私をどう

おほほほほ。」 大枚のお金子だあね、なあお婆さん。「殺して耐るもんか、大枚のお金子だあね、なあお婆さん。

て下熨帚。

「殺さなくッたって可いのよ、可いのよ、厭なら止せ、私ど真蒼になり、髪も乱れて、泣吃逆をしいしい、

世間にゃあ、鬼ばッかり。」とはや血が狂ったか舌も縺れて他から覚えているが可い。私誰も構っちゃあくれないんだもの、うせ死ぬんだから。そして、あの皆神月さんに言付けてやる

一つ煙管で撲った。婆の膝によりかかって肩で息を吐いている、胸の処を、また「ええ、性根をつけないかい!」と、力なく己を捕えた敵の腕、愛がない。

「待て、」と縋って戸口で押えたのは源次であった。あッという間に、蝶吉の姿はひらひらとして見えなくなる。瓶を突覆すと、凄じい音がして燦と立った灰神楽、灯も暗く、途端に糸切歯をきりりと鳴して、脱兎のごとく、火鉢の鉄

たと思うと、糸を曳くように颯と駈ける。け、片手は磨硝子の戸を一枚微塵に砕いた、蝶吉は飜って出駒下駄を襷がけに振ったので、片手は源次が横顔を打って退駒を歩きがけに振ったので、片手は源次が横顔を打って退物をも言わず、据った瞳で、じっと見るや、両手に持った

五十

「こりゃ、待て。」

に忍びず、常にさる時は行いて時を消すのが例であった湯島学士は胸騒がして、瑞林寺のその寓居に胸を圧えて坐する

から、谷中に帰る途の暗がりで、唐突に手を捕えたのは一名

仔細はない。静に顧みて、毕は気も心も沈んでいたから少しも騒がず、もとより驚く の年若き警官である。

「どこへ行くか、あッ貴様は。」

言葉も荒く、ものに激しているようである。

「谷中の方へ行くんですが、」

のあるのでもなく、また罪人を悪む情が烈しいのでもなく、よく人を見て、この年少巡査があえて我を誣いんとする念慮 ろう、」とほとんど狂人に斉しい譫言を言ったけれども、梓は「うむ、墓原へでも寝に行くか、嘘を吐け!」き様掬摸じゃ に逸るのであることを知った。 単に職務に熱誠であるため、 自ら抑うることの出来ない血気

る。 たのに聞いても、品位ある青年であることが分るであろうに、 る。清らかなその面を見ても、可懐しい香の薫の身に染み「貴方御心配には及びません。」と微笑むばかりに涼しく答え「ぁゐぁ

警官は余り職務に熱心であった。

「名を言え、番地はどこか。」

「こら!」と驚くべき声で詈り喚く。

あえて憚る処はないけれども、名告るは惜しい名であった。

「玉……月、」とばかり言葉が濁る、と聞免さず、

「玉月、あ、秋太郎です。」といったが我にもあらず狼狽たの 「玉……玉……玉何だ、」と畳みかけて尋問する。

である。

「下宿して、」

れて、トむねをついて猶予って、悪いことをしたと思った。 「どこだ、何というか、うむ、疾く言わんか。」と急き立てら 横顔を一拳、拉げよと撲りつけて、威丈高になって、

とをかつて覚えぬ。夜目にこそ見えね色を作して、 蒲柳の公子は生れて以来、「来い、」 かばかりの恥辱を与えられたこ

君!

しっかと取ったが声も震えて、 「馬鹿いえ、君たあ何か、」とい いざまに横、撲に払く手を、

「名を言おう。」

何い。」

吻と息を吐いて俯向いた。学士はここで名乗った名が太くも汚 場 。神月梓というんだよ。」といいながら手を向うへ押遣ったが、

れたように感じたのである。

警官はこれを聞くと、その偽名を語ったゆえんを詰ろうと

もせず、たちまち声を和げて、

「さようか、何にしても交番まで、」といって、 「用があるんですか。」と、「憤」はまだ消えず、冷かに答えた。 巡査はその仔

ことを言っている。最初その女が路を歩いている時背後からったが、神月という人を尋ねるのだとばかりで、取留のない ちょうど今しがた、根津の交番で、太く取乱した女が一人 掴**

語りかけて巡査は囐けるがごとく梓を見て、調べる、旁、その悪漢の手当に巡行を命ぜられたものである。何ぞ悪意あって尾行したものであろうという鑑定で、女を取で、女は身装の可い上に、容色が抜群であるから、掬摸か、一人跟けて来た男があった、ということを通行人が告げたの一人跟けて来た男があった、ということを通行人が告げたの

星

色狂気の亭主だな。」

五 十 一

至って梓は絶望したのである。 しかり、==色狂気の亭主==これを警官の口から聞くに

ひいひい泣いていた。へ捻られたまま、水を張った手桶にその横顔を押着けられて、へ捻られたまま、水を張った手桶にその横顔を押着けられて、くと、夜更で人立はなかったが、交番の中に、蝶吉は、腕を背されば冥土を辿るような思いで、弥生町を過ぎて根津まで行されば実みとを

に答えた警官の語は、極めて明瞭に、且つ極めて正当なものに答えた警官の語は、極めて明瞭に、且つ極めて正当なものの紙入も、落交って狼藉極まる、蝶吉はあたかも手籠にされの紙入も、落交って狼藉極まる、蝶吉はあたかも手籠にされの紙入も、落交って狼藉極まる、蝶吉はあたかも手籠にされの紙入も、落交って狼藉極まる、蝶吉はあたかも手籠にされたもののごとく、三人懸りで身動きもさせない様子で、一人たもののごとく、三人懸りで身動きもさせない様子で、一人たもののごとく、三人懸りで身動きもさせない様子で、一人に関がしていたが、懐中鏡やら鼈甲に透彫の金蒔絵はあた。近ばはがみまで、情がです。

の果で、今は府下のある小新聞に探訪員たる紳士であった。目の鋭いのがすなわちそれで、渠は学士に怨のある書生の身で変番の窓に頬杖を支いて、様子を見ている一名紋着を着た

横ざまに膝に抱上げた。士は見る目も可憐さに死んだもののようになっている蝶吉をこれにも答えず、もとより警官には返すべき言もなく、学

「神月だ。」

「やあ、神月。」

角燈の灯の達かぬ、暗がりの中に消えてしまった。が、深更分の写真、大学の制服で、折革鞄を脇挟んだのを受取って、「そら忘物だ、」といって投出して呉れたのは、年紀二十の自下駄を穿かせて、手を引いて交番を出ようとする時、下駄を穿かせて、手を引いて交番を出ようとする時、まわず骨も砕くるばかり、しっかと違って離れぬのを、賺

は大川で別でな。
へ、梓は頬を重ねていた。その時は二人抱合っていたが、死骸へ、梓は頬を重ねていた。その時は二人抱合っていたが、死骸その黒髪を敷くばかり、蝶吉は身を横に、顔を仰けにした上せ行く響、山下を抜けて広徳寺前へかかる時、合乗の泥除にの大路に車の轆る音が起って、都の一端をりんりんとして馳

に巻きしめていた。 男は顔を両手で隠して固く放さず、女は両手を下 〆で鳩尾

とく、 いて、 にその紅顔を押当てて落涙しつつ頭を掉った。星はその時 は卵塔の背後に粛然として、頷いたが、一人竜田は、柳沢のである。哲学者は直ちに霊前に合掌してこれを誓い、 いたであろう。 に音信るる玉司子爵夫人竜子であるが、 にあらわれぬよう、 弔うものは、梓が生前の三個の信友と、 その自分がここに詣ずることは、 ゆくりなく三人の学士にあった時、 いかに、 名にかけて誓われたいといって。跪いたこに詣ずることは、固く秘密を守って世 紫か、 緑か、 燦然として。 時、哀を請うものの、姫は一夜、墓前に いま一人、忍々 柳沢の胸 墓前にお のご

明治三十二(一八九九)年十一月

-58-